茨城県教育財団文化財調査報告第367集

中根中谷津遺跡2

（なかねなかやつ）

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅻ

平成25年3月

独立行政法人都市再生機構
首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部

公益財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では，つくば市を日本における科学技術の研究開発の中核として，さらに国際交流の拠点としてふさわしい街にすべく整備を進めております。

この新しい街づくりの一環として，つくば市と独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部は，市と首都圏を直結する「つくばエクスプレス」の沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業を計画的に推進しています。しかしながら，その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である中根中谷津遺跡が所在し，記録保存の措置を講ずる必要があるため，当財団が住宅・都市整備公団つくば開発局（現 独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部）から開発区域内における埋蔵文化財発掘調査事業の委託を受け，平成８・９年度及び平成22年度（独立行政法人都市再生機構茨城地域支社の委託）にこれを実施しました。平成８・９年度の調査成果は，既に当財団の『茨城県教育財団文化財調査報告』第139集として刊行しているところであります。

本書は，平成22年度の調査成果を収録したもので，学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者であります独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部から多大な御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げますとともに，茨城県教育委員会，つくば市教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，深く感謝申し上げます。

平成25年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木欣一

例　　言

1　本書は，独立行政法人都市再生機構茨城地域支社（現 独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部）の委託により，財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）が平成22年度に発掘調査を実施した，茨城県つくば市中根字中谷津815番地ほかに所在する中根中谷津遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

調査　平成22年11月1日～12月31日

整理　平成24年 4月1日～ 6月30日

3　発掘調査は，調査課長池田晃一のもと，以下の者が担当した。

首席調査員兼班長　　仲村浩一郎

主 任 調 査 員　　酒井雄一　櫻井完介

調　　査　　員　　鹿島直樹

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理課長原信田正夫のもと，首席調査員荒蒔克一郎が担当した。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，X = + 11,640 m，Y = + 26,700 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお，この原点は，日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し，4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ1，2，3…とし，「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3，…0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2　実測図・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　　HG －遺物包含層　P －ピット　SI －竪穴住居跡

遺物　　G －ガラス製品　DP －土製品　P －土器　Q －石器　TP －拓本記録土器

土層　　K －撹乱

3　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1，竪穴住居跡の実測図は 60 分の 1 の縮尺で掲載した。遺物包含層の実測図は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は，原則として 3 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構実測図中の表示は，次のとおりである。

●土器　　□石器

遺構実測図中の網フセについては，それぞれの頁に凡例を示した。

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。また，土層解説中の含有物については，各々総量を記述した。

5　遺物観察表の表記は，次のとおりである。

(1) 現存値は（　）を，推定値は［　］を付して示した。計測値の単位は㎝，gで示した。

(2) 備考の欄は，残存率，写真図版番号を記した。

(3) 遺物番号は第 139 集からの通し番号とし，本文，挿図，観察表，写真図版に記した番号と同一とした。

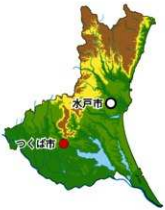
6　竪穴住居跡の主軸方向は，遺構の長径（軸）方向が，座標北からみてどの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N － 10゜－ E）。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
中根中谷津遺跡の概要 …… 1
第１章　調査経緯 …… 3
　第１節　調査に至る経緯 …… 3
　第２節　調査経過 …… 4
第２章　位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の成果 …… 11
　第１節　調査の概要 …… 11
　第２節　基本層序 …… 11
　第３節　遺構と遺物 …… 13
　　１　縄文時代の遺構と遺物 …… 13
　　(1) 竪穴住居跡 …… 13
　　(2) 遺物包含層 …… 16
　　２　その他の遺物 …… 40
　　遺構外出土遺物 …… 40
　第４節　まとめ …… 40
写真図版 …… PL 1～PL 8
抄　録
付　図

中根中谷津遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的



中根中谷津遺跡は，つくば市の東部に位置し，桜川右岸の標高 25 mほどの舌状台地上に立地しています。中根・金田台特定土地区画整理事業にともない，遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため，茨城県教育財団が平成 22 年度に 831㎡について発掘調査を行いました。

調査の内容

調査は，平成８・９年度に行われた第１・２次調査に続くものです。今年度調査した調査７区は，遺跡の南西斜面部に位置しています。調査の結果，縄文時代後期（約 3,500 年前）の竪穴住居跡１軒と遺物包含層１か所を確認しました。主な出土遺物は，縄文土器（深鉢・鉢・浅鉢・壺・注口土器・ミニチュア土器・手捏土器），土製品（土偶・土版・有孔円盤・土器片円盤），石器（磨製石斧・打製石斧・石皿・磨石・石錘），石核，剥片などで，特に遺物包含層からは 25,000 点（重量：約 650kg）を超える多量の縄文土器が出土しています。

調査区遠景（北西上空から）

調査区全景（北東上空から）

堆積状況の実測作業

第８号遺物包含層遺物出土状況

第８号遺物包含層から出土した縄文土器

調査の結果

調査区は西側に入り込んだ谷に向かって緩やかに傾斜しており，この斜面に形成された遺物包含層からは，多量の遺物が出土しています。土器のほとんどが縄文時代後期（約 3,500 年前）のもので，破片の状態で出土しています。調査区東側の台地上からは，これらの土器と同じ時代の集落跡が見つかっており，遺物包含層から出土した土器片は，この集落から捨てられたり，流れ込んだりしたものと考えられます。

遺物のなかには，土偶や土版などマツリに使われた道具や住居の入口に伏せて置かれた土器なども見つかり，縄文時代の人びとの祈りの姿を垣間見ることもできます。

西側にある谷の対岸には，縄文時代後期の終わりごろから晩期のはじめごろ（約 3,000 年前）に形成された上境旭台貝塚（かみさかいあさひだいかいづか）があり，当集落の後に続く集落と考えられます。

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

つくば市では，世界に開かれた国際交流の中心，世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として，21世紀の新しい街づくりが進められている。その一環として取り組んでいるのが，2005年の「つくばエクスプレス」開業に伴う沿線の開発である。中根・金田台地区については，住宅・都市整備公団つくば開発局（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に，平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に，平成16年7月から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社に，平成23年7月から独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部に名称を変更）を事業主体として，土地区画整理事業を進めている。

平成6年11月18日，住宅・都市整備公団つくば開発局長は茨城県教育委員会教育長に対して，中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は，平成7年5月15日から6月8日にかけて現地踏査を，10月9日から13日にかけて試掘調査を実施した。同年12月28日，茨城県教育委員会教育長は，住宅・都市整備公団つくば開発局長あてに，事業地内に中根中谷津遺跡が所在すること及びその取り扱いについて，別途協議が必要であることを回答した。

平成8年8月26日，住宅・都市整備公団つくば開発局長は，茨城県教育委員会教育長あてに，文化財保護法第94条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は，現状保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると決定し，平成8年8月26日，住宅・都市整備公団つくば開発局長あてに，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成22年3月17日，独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長は，茨城県教育委員会教育長あてに，中根・金田台特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成22年3月26日，茨城県教育委員会教育長は，独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに，中根中谷津遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて調査機関として財団法人茨城県教育財団（平成24年4月から公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は，独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成22年11月1日から12月31日まで発掘調査を実施した。

第2節　調　査　経　過

本調査は，平成22年11月1日から12月31日までの2か月間にわたって実施した。以下，その概要を表で記載する。

工程＼月	11　月			12　月		
調査準備 表土除去 遺構確認	■					
遺構調査		■	■	■	■	
遺物洗浄 注記 写真整理		■	■	■	■	
補足調査 撤収						■

第2章　位　置　と　環　境

第1節　地　理　的　環　境

中根中谷津遺跡は，茨城県つくば市字中谷津815番地ほかに所在している。

つくば市は，茨城県の南西部に位置している。市域の多くは，標高25ｍほどの筑波・稲敷台地と呼ばれるほぼ平坦な台地上にある。当台地の東から北端は，桜川が標高５ｍほどの桜川低地と呼ばれる沖積低地を形成しながら霞ヶ浦に流入し，西から南端を流れる小貝川はほぼ南流し，利根川に流入している。また，両河川とほぼ並行して流れる花室川，蓮沼川，東谷田川，西谷田川などの小河川は，樹枝状に開析谷を形成しながら牛久沼に流入している。特に，当遺跡が所在する桜川右岸域は開析度合が高く，樹枝状の小谷津が入り込み，谷密度も高い。

筑波・稲敷台地は，千葉県北部から茨城県南部域に広がる常総台地の一部であり，地質的には新生代第四紀洪積世に形成された地層が堆積している。下層は成田層及び竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体をなし，その上層に常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層，さらに上位には関東ローム層，腐食土層が連続して堆積している[1]。

当遺跡は，つくば市の東部に位置し，桜川右岸の標高25ｍほどの舌状台地上に立地しており，桜川低地との比高は18ｍほどである。この舌状台地は，南西から北東に向かって伸びており，調査区はその西部の斜面に設定されている。調査区西側に入り込む小谷津は，桜川低地からほぼ南に向かって開析されており，谷津頭は近年の道路建設により池となっている。なお，現霞ヶ浦汀線からの直線距離は約９㎞である。

当遺跡とその周辺の土地利用の現況は，主として畑地，宅地であり，台地縁辺部の一部は雑木林や杉林である。また，桜川によって形成された沖積低地は，主に水田として利用されている。当遺跡の調査前現況は，山林であった。

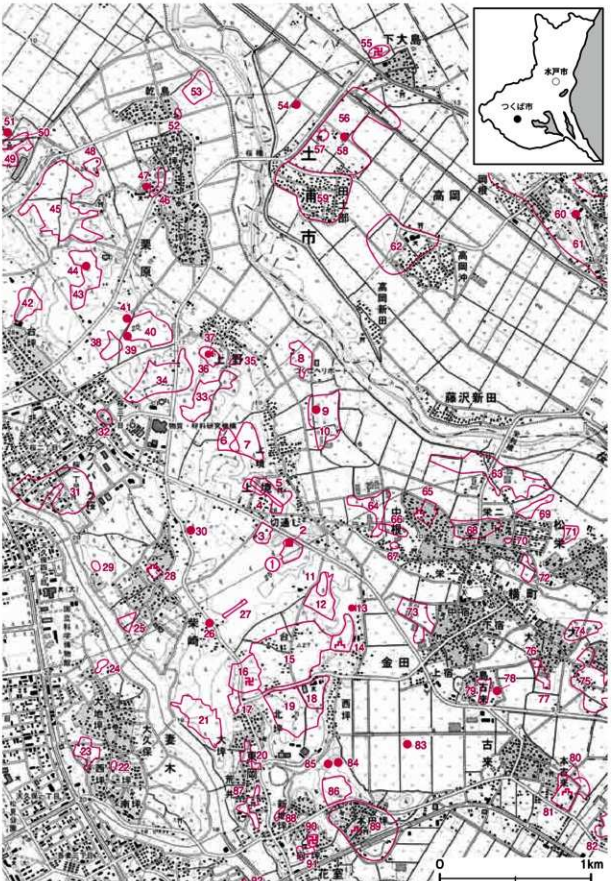
第2節　歴　史　的　環　境

桜川と花室川に挟まれた平坦な台地上は，旧石器時代から中世にわたる遺跡の密集地である[2]。本節では，当遺跡の主たる時期である縄文時代の遺構や遺物が確認されている遺跡を中心に，周辺の遺跡を概観する。

当台地上で人々の生活痕跡が認められるのは後期旧石器時代に遡り，東岡中原遺跡〈21〉では，荒屋型彫器を含む細石刃石器群が確認されている[3]。

今から約１万２千年前に始まる縄文時代から，地球規模の温暖化に伴い，内陸部に海水が浸入するいわゆる縄文海進により，縄文時代早期末から前期始めころには，霞ヶ浦周辺に広大な内海が形成された。この内海の発達に伴って，台地縁辺部を中心に貝塚が形成されるようになる。桜川下流域及び霞ヶ浦土浦入沿岸では，土浦市沖宿貝塚群の早期末に遡る事例を最古として，前期の貝塚が多く確認されている。桜川水系の前期の貝塚では，当遺跡の桜川を挟んだ対岸約３㎞に上坂田寺浦貝塚，下坂田鹿島前貝塚が，下流４㎞に宍塚貝塚が所在しており，いずれも内湾の浅海にある砂泥底に生息するハイガイを主体とする貝塚であり，当時の水辺環境が推測される。

中期になると遺跡数が激増し，これらの遺跡の多くは後期あるいは晩期まで継続しているのが特徴である。



第1図　中根中谷津遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1「上郷」「常陸藤沢」）

表1　中根中谷津遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	中根中谷津遺跡	○	○			○		
2	中根中谷津古墳				○			
3	上境旭台貝塚		○		○			
4	上境滝ノ塞遺跡		○	○				
5	上境滝の台古墳群				○			
6	上境作ノ内遺跡		○	○	○			
7	上境作ノ内古墳群				○			
8	上境北ノ内遺跡					○	○	○
9	上境どんどん塚古墳				○			
10	上境古屋敷遺跡				○	○	○	○
11	横町古墳群				○			
12	横町庚申塚遺跡		○		○	○	○	○
13	金田古墳				○			
14	金田城跡					○		
15	金田西遺跡		○		○	○	○	○
16	九重東岡廃寺					○	○	○
17	東岡中畑遺跡					○		
18	金田西坪A遺跡					○		
19	金田西坪B遺跡		○		○	○		
20	東岡南遺跡					○	○	○
21	東岡中原遺跡	○	○			○	○	○
22	妻木宮前遺跡					○	○	○
23	妻木坪内遺跡					○	○	○
24	妻木鴻ノ巣遺跡				○	○		
25	柴崎南遺跡		○		○		○	○
26	柴崎稲荷前古墳				○			
27	柴崎大堀遺跡						○	○
28	柴崎片岡上館					○	○	○
29	柴崎ボッケ遺跡					○		
30	柴崎大日古墳				○			
31	柴崎遺跡				○	○	○	
32	上野中塚遺跡		○			○		
33	上野古屋敷遺跡	○	○	○	○	○	○	○
34	上野陣場遺跡		○			○	○	
35	上野定使古墳群				○			
36	上野天神遺跡		○					
37	上野天神塚古墳				○			
38	栗原大山西遺跡					○	○	○
39	栗原十日塚古墳				○			
40	栗原大山遺跡				○	○		
41	栗原愛宕塚古墳				○			
42	栗原才十郎遺跡		○					
43	栗原五竜遺跡		○		○	○	○	
44	栗原五龍塚古墳				○			
45	栗原中台遺跡		○	○	○	○	○	○
46	栗原古塚遺跡					○	○	○

番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
47	栗原古塚古墳				○			
48	栗原登戸遺跡					○	○	
49	玉取遺跡		○	○	○	○		○
50	玉取古墳群				○			
51	玉取弁天塚						○	○
52	栗原遺跡					○	○	○
53	栗原沼向遺跡				○	○	○	
54	稲荷塚古墳				○			
55	下大島遺跡							
56	広畑遺跡				○	○	○	○
57	田土部明神古墳群				○			
58	供養塚							○
59	田土部館跡						○	
60	大日塚古墳(鹿島神社)				○			
61	岡の宮遺跡		○		○	○		
62	五斗内遺跡				○	○		
63	中根遺跡				○	○	○	
64	中根不棄抜遺跡		○			○	○	○
65	中根屋敷附館跡					○	○	○
66	中根とりおい塚古墳群				○			
67	中根宮ノ前遺跡					○	○	○
68	栄土器屋遺跡					○	○	○
69	松塚鶯打遺跡					○	○	○
70	栄屋敷付遺跡					○	○	○
71	松塚高畑遺跡				○	○	○	
72	栄尼塚遺跡						○	○
73	金田竜宮橋遺跡					○	○	○
74	大白畑遺跡				○	○	○	○
75	大寺前遺跡				○	○	○	○
76	阿弥陀寺跡						○	○
77	大南遺跡				○	○	○	○
78	古来島ノ前塚						○	○
79	古来北ノ崎遺跡					○	○	○
80	古来遺跡					○	○	
81	古来館跡					○	○	
82	吉瀬黄金遺跡				○	○	○	○
83	金田本田遺跡					○	○	
84	花室大日塚古墳				○			
85	花室後田塚						○	○
86	花室遺跡		○			○		
87	東岡天神前遺跡					○	○	○
88	花室溝向遺跡					○		
89	花室城跡		○	○	○	○	○	○
90	花室寺畑廃寺						○	
91	花室寺山前遺跡					○	○	○
92	花室大根遺跡				○			

当遺跡周辺においても，上境滝ノ臺遺跡〈4〉，中根不葉抜遺跡〈64〉，金田西遺跡〈15〉，柴崎南遺跡〈25〉では中期の，金田西坪A遺跡〈18〉，金田西坪B遺跡〈19〉，花室遺跡〈86〉では中期から後期にかけての遺構や遺物が確認されている。中期の貝塚は，阿見町竹来貝塚や見目貝塚など，霞ヶ浦に直面する台地上に立地し，サルボウガイ，アカガイ，ハマグリなどが主体の主鹹貝塚の様相を呈しており，海退を含めた前期から中期にかけての水辺の環境変化が指摘されている[4]。

花室川右岸約6km下流の下広岡遺跡では，中期中葉阿玉台式期から中期後葉加曽利E式期の竪穴住居跡86軒と，袋状土坑を含む土坑600基以上が確認されている。また，袋状土坑からは多量の縄文土器のほか，パン状炭化物や炭化種子などが出土しており注目される[5]。当遺跡近隣の遺跡としては，上野陣場遺跡〈34〉があげられ，前期前葉花積下層式期から中期後葉加曽利E式期までの竪穴住居跡8軒と土坑8基が調査されている[6]。また，上野古屋敷遺跡〈33〉でも前期前葉の竪穴住居跡18軒と中期加曽利E式期の竪穴住居跡1軒，陥し穴3基，土坑55基が調査されている[7]。上野陣場・上野古屋敷遺跡では中期の集落は主体となりえず，当遺跡及び上境旭台貝塚でも中期の遺物がほとんど確認できなかったことを勘案すると，中期後葉の当遺跡近隣が食糧獲得に適した環境ではなかったことが推察される。

当遺跡の存続時期と同じ後期から晩期に最盛期を迎える遺跡には，当遺跡と桜川低地を挟んだ対岸に位置している下坂田貝塚，桜川右岸約5km下流の上高津貝塚があげられる。下坂田貝塚は中期から晩期の遺跡であるが，貝層の主体は後期中葉加曽利B式期で，出土貝類の98%以上がヤマトシジミである[8]。国指定史跡である上高津貝塚は後期から晩期にかけて形成された大規模な馬蹄形貝塚で，4地点からなる貝層はヤマトシジミが主体である。捕獲魚類として汽水域を主たる生息域とするクロダイやスズキなどの魚骨が多量に確認され，当水域が汽水化していく傾向がうかがえる。また，加曽利B式期の貝層中から外洋の水深30m以下の海底に生息するマダイ成魚の骨が多量に出土しており，該期縄文人の漁労活動を推測するうえで興味深い資料を提示している[9]。

当遺跡と谷津を挟んで西側の対岸に所在する上境旭台貝塚〈3〉は，地元では古くから知られた遺跡であり，桜村立栄小学校郷土クラブ，桜村教育委員会によって調査が行われ[10]，平成元・2年度には筑波大学による地形測量が実施されている[11]。平成19年度から平成23年度までに計6次にわたり当財団が調査を実施し，縄文時代後期初頭から集落が営まれ始め，後期後葉から晩期前葉に貝塚及び遺物包含層が形成されたことが確認されている。検出された貝層は，出土貝類の95%以上がヤマトシジミの斜面貝層で，イノシシ，シカを主体とした獣骨が多数出土しているのが特徴である[12]。当遺跡に後続する集落跡ととらえることができる。

縄文時代以降も桜川と花室川に挟まれた「中根・金田台」地区は，継続して集落が営まれ続けている。上野陣場遺跡では10世紀後半まで，隣接する上野古屋敷遺跡でも16世紀代まで，断続的ながら集落が確認されている。当該地は，奈良時代・平安時代には，河内郡菅田郷に属し，北は筑波郡に接している。当遺跡の南約1kmに位置している国指定史跡である金田西遺跡，金田西坪A遺跡，金田西坪B遺跡，九重東岡廃寺〈16〉は河内郡衙跡と関連遺跡群と推定されている[13]。また，東岡中原遺跡，柴崎遺跡[14]〈31〉，上野陣場遺跡などは河内郡衙を支えた集落と位置付けられており，当該地が河内郡の中心地であったことが想定される。鎌倉時代から戦国時代には小田氏及び佐竹氏の支配下となり，台地上には金田城跡〈14〉をはじめとする中小城館及びその関連施設が築かれ，領主層の抗争の舞台となった。しかし，小田氏の衰退に伴い土豪層の多くが帰農したことに伴って，集落の廃絶と移動があったと考えられる。江戸時代になると，上野・栗原地区は堀氏玉取藩の知行地であったが，旧桜村の多くは土浦藩に属することになり，明治4（1874）年の廃藩置県に至っている。

※本章は，『茨城県教育財団文化財調査報告』第364集をもとに，若干の加筆をしたものである。なお，文中の〈　〉内の番号は，第1図及び表1の該当番号と同じである。

註

1）大山年次監修『茨城県　地学のガイド』コロナ社　1977年8月

2）a茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会　2001年3月
　b茨城県つくば市教育委員会『つくば市遺跡分布調査報告書－谷田部地区・桜地区』2001年3月

3）a成島一也「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　中原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第155集　2000年3月
　b成島一也・宮田和男「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　中原遺跡2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第159集　2000年3月
　c高野節夫・白田正子・仲村浩一郎・島田和宏「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　中原遺跡3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集　2001年3月
　d駒澤悦郎「東岡中原遺跡4　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第251集　2005年3月

4）真貝理香「遺跡の位置と環境」『国指定史跡上高津貝塚A地点』慶応義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報9　1994年3月

5）高根信和・加藤雅美・小河邦男「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告X』1981年3月

6）a川上直登・長谷川聡・大塚雅昭「上野陣場遺跡　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第182集　2002年3月
　b川井正一・齋藤和浩「上野陣場遺跡2　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅺ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第323集　2009年3月

7）a三谷正・大塚雅昭・桑村裕「上野古屋敷遺跡1　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第285集　2007年3月
　b川井正一「上野古屋敷遺跡2　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第307集　2008年3月
　c齋藤和浩・川井正一「上野古屋敷遺跡3　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅻ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第324集　2009年3月
　d櫻井完介・江原美奈子「上野古屋敷遺跡4　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XIII」『茨城県教育財団文化財調査報告』第334集　2010年3月

8）前田潮編『古墳ヶ浦湾』沿岸貝塚の研究』『筑波大学先史学・考古学研究調査報告』Ⅵ　1991年3月

9）a佐藤孝雄・大内千年編『上高津貝塚A地点』慶応義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報9　1994年3月
　b塩谷修編『国指定史跡上高津貝塚E地点－史跡整備事業に伴う発掘調査報告－』土浦市教育委員会　2000年3月
　c石川功・福田札子編『国指定史跡上高津貝塚C地点－史跡整備事業に伴う発掘調査報告－』土浦市教育委員会 2006年3月

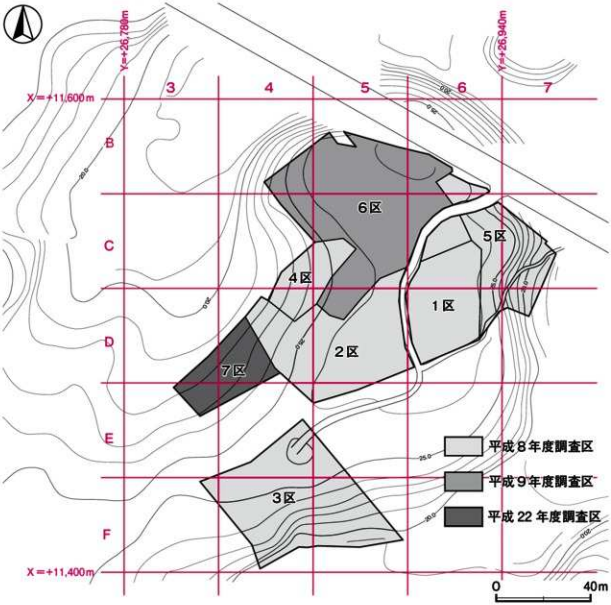
10）桜村史編さん委員会『桜村史　上巻』桜村教育委員会　1982年3月

11）註8）に同じ

12）a柴山正広・須賀川正一・小野政美・小川貴行・越川欣和「上境旭台貝塚　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XIII」『茨城県教育財団文化財調査報告』第325集　2009年3月
　b江原美奈子「上境旭台貝塚2　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XIV」『茨城県教育財団文化財調査報告』第364集　2012年3月

13）a白田正子「九重東岡廃寺確認調査報告書1」財団法人茨城県教育財団　2001年3月
　b白田正子「金田西遺跡　金田西坪B遺跡　九重東岡廃寺　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第209集　2003年3月

14）a土生朗治「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）　柴崎遺跡Ⅱ区」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第72集　1992年3月
　b萩野谷悟「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）　柴崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第93集　1994年9月



第２図　中根中谷津遺跡調査区設定図（つくば市都市計画基本図」1/2,500 から作成）

第3章　調　査　の　成　果

第1節　調　査　の　概　要

中根中谷津遺跡は，桜川右岸の標高 25 mほどの北東に張り出す舌状台地上に立地している。遺跡の範囲は南北 170 m，東西 160 mほどで，舌状台地のほぼ全域に及んでいる。今回の調査区はその西部の斜面部に位置している調査7区で，調査面積は 831㎡である。今回の調査は，平成8年10月から平成9年3月（第1次），平成9年4月から7月（第2次）に実施された調査に続く第3次調査となる。第1・2次調査では，舌状台地上を中心に 11,373㎡を調査しており，竪穴住居跡 10 軒，地点貝塚4か所，古墳1基，土坑 115 基，溝跡 11 条，焼土遺構6基，旧石器集中地点1か所，遺物包含層4か所が確認され，大半が縄文時代後期前葉堀之内式期に帰属している。また，4か所の地点貝塚はいずれもヤマトシジミ主体の土坑内貝塚であった。

今回の調査では，縄文時代の竪穴住居跡1軒，遺物包含層1か所を確認し，本調査区が縄文時代後期前葉を主体とする集落の周縁部にあたることが分かった。

遺物は，遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20cm）に 67 箱出土している。出土遺物のほとんどが縄文時代後期前葉堀之内式期及び後期中葉加曽利B式期の土器片（深鉢，鉢，浅鉢，壺，注口土器，ミニチュア土器，手捏土器）で，ほかに土製品（土偶，土版，有孔円盤，土器片円盤），石器（磨製石斧，打製石斧，石皿，磨石，石錘），石核，剥片などが出土している。

第2節　基　本　層　序

調査区南部の谷津に向かう緩斜面部に設定したCトレンチを地山まで掘り込みテストピットとし，基本土層の観察を行った。ローム土は3 mほど掘り込んだ地点で検出したが，湧水等により崩落の危険があるためそれ以下の層は掘り込むことができなかった。第3層から第6層は縄文時代後期前葉から中葉の土器片が多く含まれる遺物包含層である。一方，第7層から第9層には遺物は含まれておらず，縄文時代後期前葉以前に形成された谷津への土砂の流入による再堆積層ととらえることができる。以下，各層についての解説をする。

第1層は，黒褐色を呈する耕作土である。粘性・締まりともに弱く，層厚は 20 ～ 30cmである。

第2層は，暗褐色を呈し，焼土粒子及び炭化粒子を微量含む谷津の再堆積層である。粘性・締まりともに普通で，層厚は 46 ～ 60cmである。

第3層は，黒褐色を呈する谷津の再堆積層で，縄文時代後期前葉から中葉の土器片を含む遺物包含層である。粘性・締まりは強く，層厚は 25 ～ 43cmである。

第4層は，黒色を呈する谷津の再堆積層で，第3層と同様に縄文時代後期前葉から中葉の土器片を含む遺物包含層である。粘性・締まりは強く，層厚は 15 ～ 33cmである。

第5層は，褐色を呈する谷津の再堆積層で，縄文時代後期前葉主体の土器片が第3・4層よりも多量に含む遺物包含層である。粘性・締まりは強く，層厚は 28 ～ 43cmである。

第6層は，明褐色を呈する谷津の再堆積層で，第5層同様に縄文時代後期前葉主体の土器片を多量に含む遺物包含層である。粘性・締まりは強く，層厚は 25 ～ 34cmである。

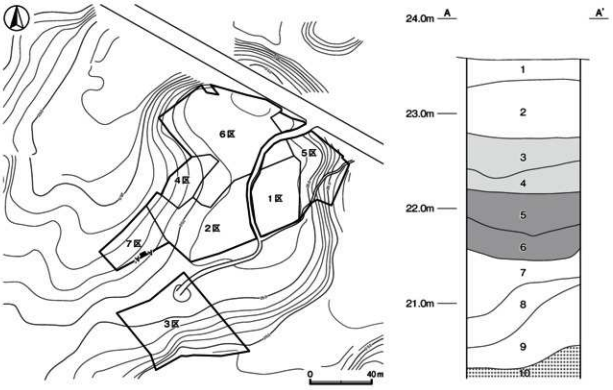
第7層は，暗褐色を呈し，細礫を少量含む谷津の再堆積層である。粘性・締まりは強く，層厚は 20 ～ 74cm

である。

第８層は，黒褐色を呈し，細礫を微量含む谷津の再堆積層である。粘性・締まりは非常に強く，層厚は９～42㎝である。

第９層は，褐色を呈し，細礫を少量含む谷津の再堆積層である。粘性・締まりは非常に強く，層厚は 20 ～64㎝である。

第 10 層は，橙色を呈し，鉄分を多く含むハードローム層である。粘性・締まりは非常に強く，層厚は 46㎝まで確認したが，下層は未掘のため不明である。



第３図　基本土層図

第3節　遺 構 と 遺 物

1　縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は，竪穴住居跡１軒，遺物包含層１か所である。以下，それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1)　竪穴住居跡

第 12 号住居跡（第４・５図）

位置　調査７区南部のＥ４al 区，標高 23 mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係　第８号遺物包含層Ｂ層の一部を掘り込んでいる。

規模と形状　調査区際Ｃトレンチの土層観察で明確な掘り込みが認められ，住居跡を想定して精査したところ，壁の一部と柱穴が確認できたため住居跡と判断した。短径（軸）は土層断面から 3.3 mで，長径（軸）は柱穴の配置及び床面の遺存状況から 4.0 mまでしか確認できなかった。平面形は楕円形または長方形が想定され，長径（軸）方向はＮ－ 30°－Ｗと推測できる。土層断面で確認できた壁高は 44 ～ 56cmで，外傾して立ち上がっている。

床　北西方向に緩やかに傾斜している。谷の埋没土を床面とし，全体的に軟弱で顕著な硬化面は認められない。

ピット　５か所。Ｐ２・Ｐ３はそれぞれ径 34cm・53cmの円形及び楕円形，深さは 12cm・26cmであり，配置から主柱穴と判断される。Ｐ１は径 50cmの円形，深さは 35cmで，口縁部及び底部を欠いた深鉢が逆位で出土していることや位置から出入り口に伴うピットの可能性がある。また，Ｐ４は径 30cmの円形で，深さは 76cmと相対的に深く，壁際に配されていることから壁柱穴の可能性があるが，１か所のみのため明確ではない。Ｐ５は，覆土から本跡に伴うものであると判断できるが，性格は不明である。

ピット土層解説

1	暗	褐	色	焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量	3	灰	褐	色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
2	黒		色	ロームブロック少量，焼土粒子微量					

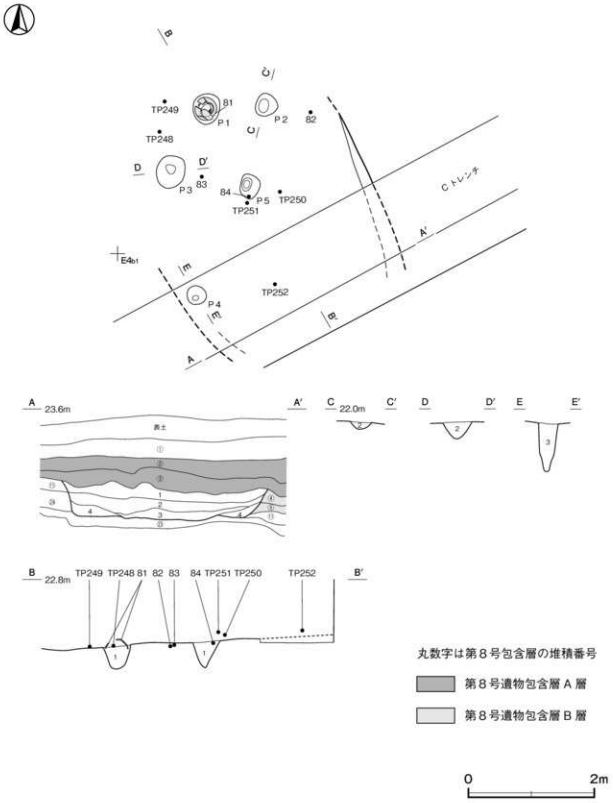
覆土　４層に分層できる。ロームブロックを多く含んでいること，破断面が磨滅している土器が第８号遺物包含層に比して少ないこと，覆土中の土器に大きな時期差が認められないことなどから，廃絶時に埋め戻していると考えられる。

土層解説

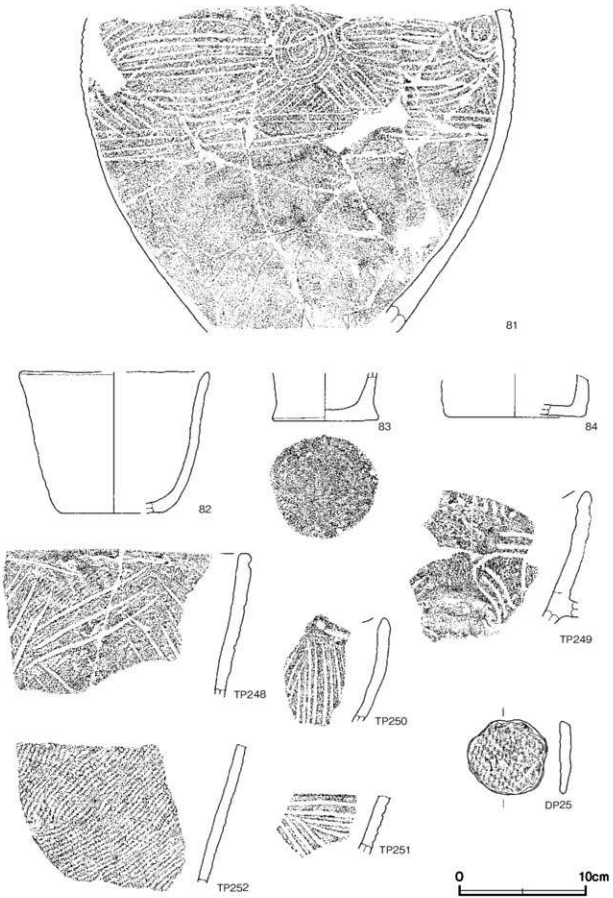
1	暗	褐	色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量	3	黒	褐	色	ロームブロック中量，焼土粒子・細礫微量
2	黒	褐	色	ロームブロック中量，焼土粒子微量	4	褐		色	ロームブロック中量，焼土粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片 213 点，土製品１点（土器片円盤）が出土している。ほとんどの土器は破片の状態で，平面的にも層位的にも偏りなく散在している。81 はＰ１をふさぐような状態の逆位で出土しており，廃絶時に遺棄されたと判断でき，時期決定の指標となる遺物である。

所見　第８号遺物包含層の範囲内に構築された住居跡である。覆土中から出土している土器のほとんどが堀之内１式であり，廃絶時の埋戻しに伴って一括して廃棄されたものと考えられる。伏せられた状態で出土している 81 の深鉢は，完全に埋設しておらず床面レベルよりも高い位置に及んでいるほか，出土位置がＰ１の外径とほぼ一致している。さらに残存率が高い土器であることを勘案すると，住居廃絶時に何らかの意図をもって遺棄された可能性が高く，埋甕の一形態である「倒置深鉢」の範疇に入るものと判断される。廃絶時期は，出土土器から後期前葉（堀之内１式期）と考えられる。



第４図　第 12 号住居跡実測図



第5図　第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
81	縄文土器	深鉢	—	(25.5)	—	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	手取竹管による横位の沈線区画　同心円状の沈線文を起点に対弧状沈線文　LRの単節縄文	P1覆土上層	60%　PL 4
82	縄文土器	鉢	(14.6)	11.1	(9.0)	長石・石英	極暗褐	普通	器面磨滅　無文	床面	30%
83	縄文土器	深鉢	—	(3.8)	8.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	胴部下端無文　底部縄文圧痕	床面	5%
84	縄文土器	深鉢	—	(3.4)	(10.4)	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤褐	普通	胴部下端無文	P5覆土上層	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP248	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	沈線による斜行文　Rの無節縄文	床面	PL 5
TP249	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	口唇部外面肥み　口縁部沈線区画内，LRの単節縄文	床面	
TP250	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	赤褐	波頂部円形刺突文，口唇部外面1条の沈線文　口縁部屈位の平行沈線による弧線文	覆土下層	
TP251	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	平行沈線による斜行文	覆土下層	
TP252	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	LRの単節縄文	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特徴	出土位置	備考
DP25	土製円盤	5.9	6.3	0.9	33.1	にぶい褐　長石・石英・赤色粒子	網代痕のある底部片の周縁を粗く研磨調整	覆土中	PL 7

(2)　遺物包含層

第8号遺物包含層（第6～20図）

位置　調査7区中央部，D 4 i1 区を中心に南北約20 m，東西約30 mの範囲に広がっており，標高20～23 mの北西に向かう斜面部に位置している。

重複関係　B層が第12号住居に掘り込まれている。

確認状況　調査区のほぼ全域にわたって，縄文土器片を含む暗褐色土が広がっていた。自然地形・堆積状況及び形成時期を把握することを目的に，調査区際及び中央部に十文字にトレンチを設定し確認調査を行い，調査区が北西方向に下る亜支谷の谷津頭部にあたることを確認した。

堆積状況　斜面の傾斜に沿ってレンズ状に堆積しており，土砂の流入及び土器等の廃棄行為にともなって谷部が埋没したものである。第1層及び第5層以下から出土した遺物はわずかで，縄文土器が集中して出土している第2～5層を遺物包含層ととらえた。なお，遺物包含層のうち，黒褐色基調の第2・3層をA層，褐色基調の第4・5層をB層と大別した。B層以下は，遺物がほとんど出土しておらず，鉄分・細礫を比較的多く含んでいることから，出土遺物の上限である縄文時代前期後葉以前の堆積層ととらえることができる。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック微量
3　黒　　色　ローム粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック中量
5　明　褐　色　ロームブロック少量
6　暗　褐　色　ローム粒子・細礫少量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　明 褐 灰 色　砂粒中量，炭化粒子・細礫微量
8　灰　褐　色　砂粒中量
9　褐　灰　色　ローム粒子中量，細礫微量
10　褐　　色　砂粒中量，細礫少量
11　暗　褐　色　ロームブロック・細礫少量，焼土粒子・炭化粒子微量
12　極 暗 褐 色　ローム粒子・細礫・砂粒微量
13　暗　褐　色　細礫少量，ローム粒子・砂粒微量
14　褐　　色　ローム粒子・細礫・砂粒少量
15　暗　褐　色　ロームブロック・細礫少量
16　褐　　色　ローム粒子・細礫・砂粒微量
17　灰　褐　色　砂粒中量，細礫微量
18　暗　褐　色　砂粒少量，ローム粒子・細礫微量
19　褐　　色　ローム粒子少量，細礫・砂粒微量
20　にぶい褐色　砂粒・細礫少量
21　褐　灰　色　細礫少量，砂粒微量
22　灰　褐　色　砂粒中量，細礫少量
23　橙　　色　砂粒中量，細礫微量
24　黒　褐　色　ローム粒子中量，細礫微量
25　褐　　色　ローム粒子中量，細礫少量
26　橙　　色　ローム粒子多量，細礫少量

遺物出土状況　縄文土器片25,617点（総重量654,470ｇ），土製品９点（土偶４，土版１，有孔円盤１，土器片円盤３），石器67点（磨製石斧２，打製石斧４，石皿16，磨石41，敲石３，石錘１），石核２点（チャート），剥片４点（黒曜石１，チャート３）のほか，混入した土師器２点（甕），須恵器３点（坏２，甕１）が出土している。

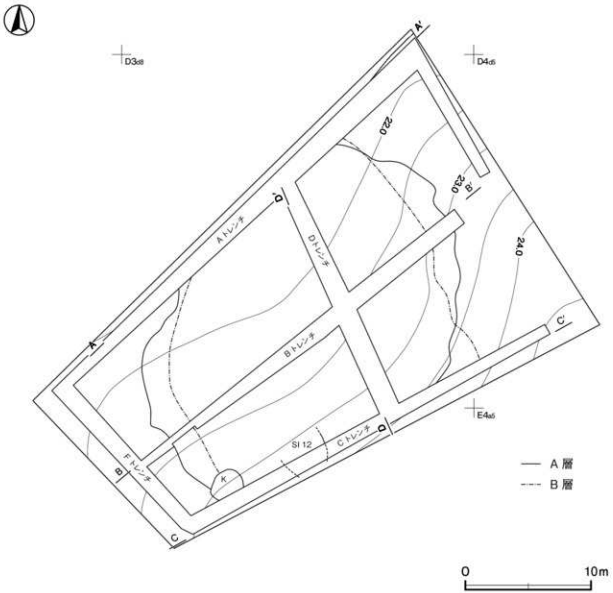
出土位置の平面的な傾向は，Ａ・Ｂ層ともに斜面東側に偏在しており，東側の台地上に占地している集落から流入または廃棄された状況が看取できる。一方，垂直分布は，Ａ層から出土した土器片数が8,693点(190,275ｇ）であるのに対して，Ｂ層のそれは15,484点（434,115ｇ）であり，Ｂ層に集中している。また，両層の土器片１点あたりの平均重量を比較するとＡ層が21.89ｇ，Ｂ層が28.04ｇとなり，Ａ層から出土している土器片の方が小さな破片が多い傾向が見られる。型式判別が可能な口縁部を含む土器片を抽出して比較した時期別の組成は表２のとおりである。ここからは，Ａ層が後期前葉（堀之内１式期）から中葉（加曽利Ｂ式期）にかけて偏りなく出土しているのに対して，Ｂ層は出土点数の約62.4％（重量比で66.9％）が堀之内１式期で，顕著な集中傾向が看取される。

所見　本跡は，西側に入り込む谷津に面した斜面部に形成された遺物包含層である。遺物が集中している層はＡ層（第２・３層）・Ｂ層（第４・５層）にほぼ限定される。Ａ層は前期後葉から後期後葉までの複数時期の土器が混入しているため，層の形成時期を限定することは困難であるが，大形の破片が少なく接合関係はほとんどないこと，土器片の磨滅が顕著であるものが多いこと，時間幅のある土器片が同一レベル・層位から出土していることなどを勘案すると，谷の自然埋没に伴って，台地上の集落から継続的に遺物が流入した結果と考えられ，後期中葉までにはほぼ埋没していた状況が想定される。一方，Ｂ層は，後期前葉（堀之内１式期）の土器片が約62.4％を占めることや覆土中にロームブロックを一定量含むことなどから，集落からの土器等の廃棄活動が主な形成要因と考えられ，同期が埋没時期ととらえることができる。

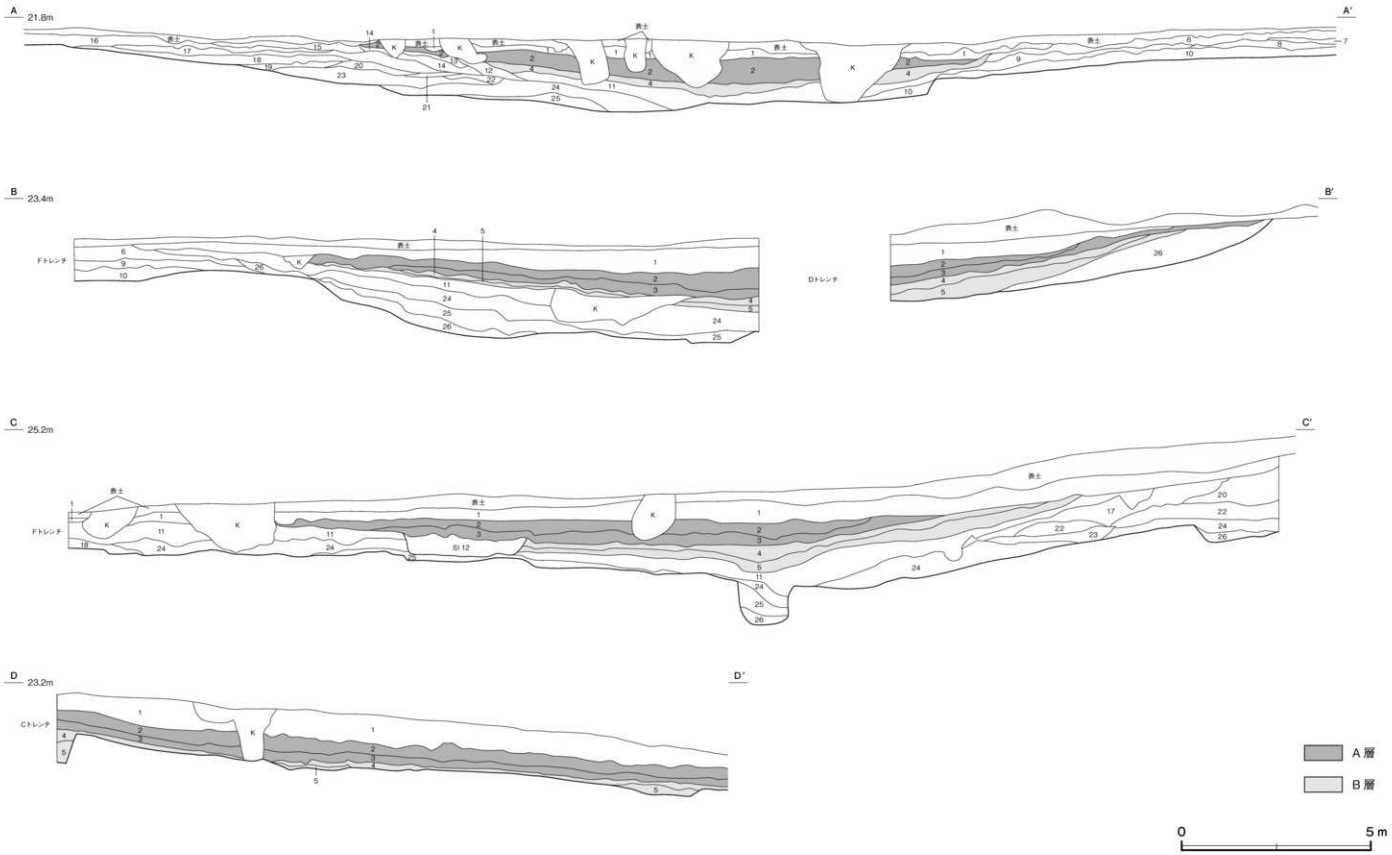
表２　第８号遺物包含層出土土器組成表

層位			第１群 中期以前	第２群 称名寺式	第３群-① 堀之内１式	第３群-② 堀之内２式	第４群 加曽利Ｂ式	第５群 後期後葉以降	第６群 不明	計
Ａ層	点数	数（点）	15	5	148	148	165	8	15	504
		割合(％)	2.98	0.99	29.37	29.37	32.74	1.59	2.98	100
	重量	重量(ｇ)	565	130	5,470	4,785	5,325	205	365	16,845
		割合(％)	3.35	0.77	32.47	28.41	31.61	1.22	2.17	100
Ｂ層	点数	数（点）	37	10	1,081	352	195	8	49	1,732
		割合(％)	2.14	0.58	62.41	20.32	11.26	0.46	2.83	100
	重量	重量(ｇ)	1,230	445	44,530	12,185	6,405	155	1,585	66,535
		割合(％)	1.85	0.67	66.93	18.31	9.63	0.23	2.38	100
群別計	点数（点）		52	15	1,229	500	360	16	64	2,236
	重量（ｇ）		1,795	575	50,000	16,970	11,730	360	1,950	83,380

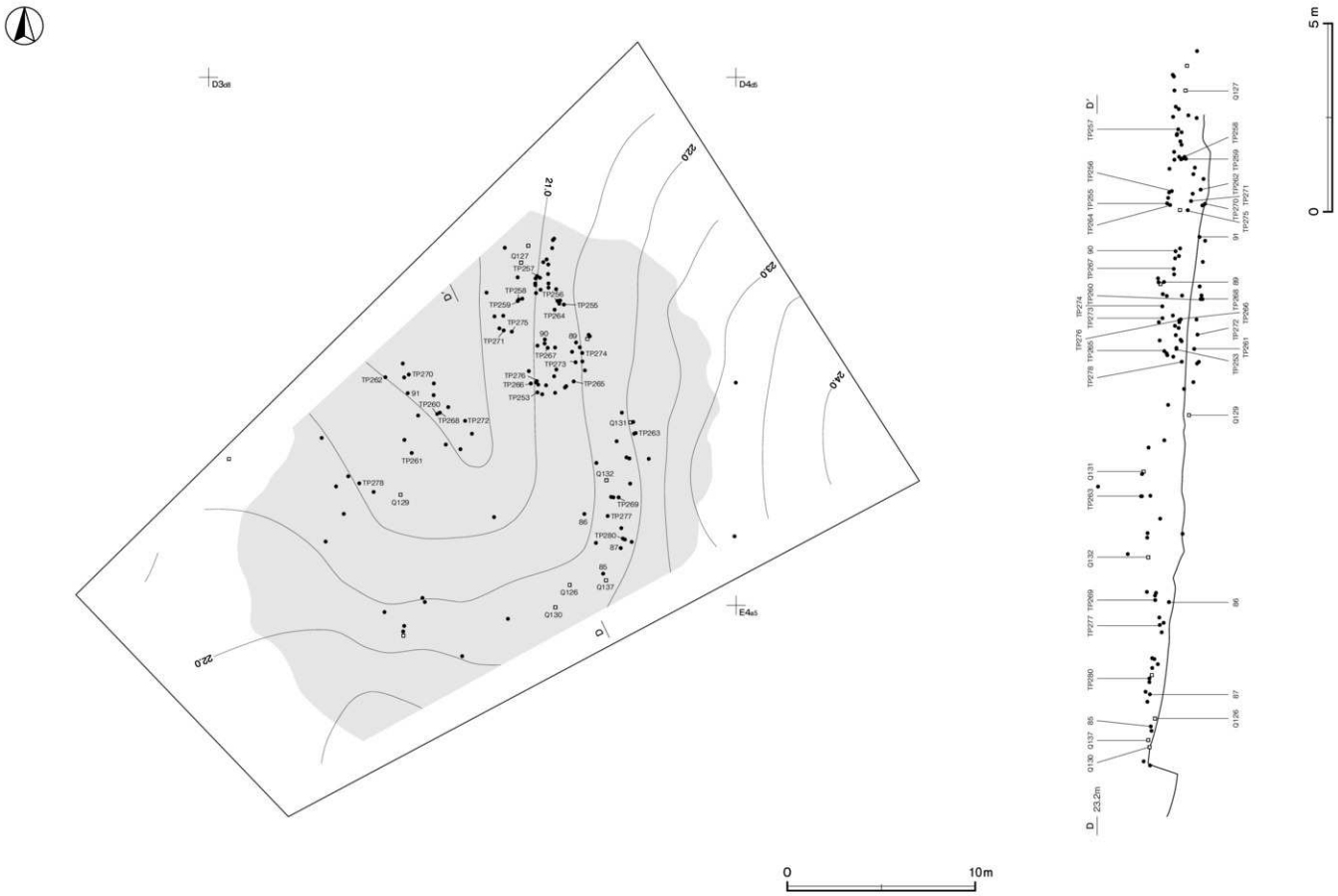
※ 型式判別が可能な口縁部が残る破片を抽出



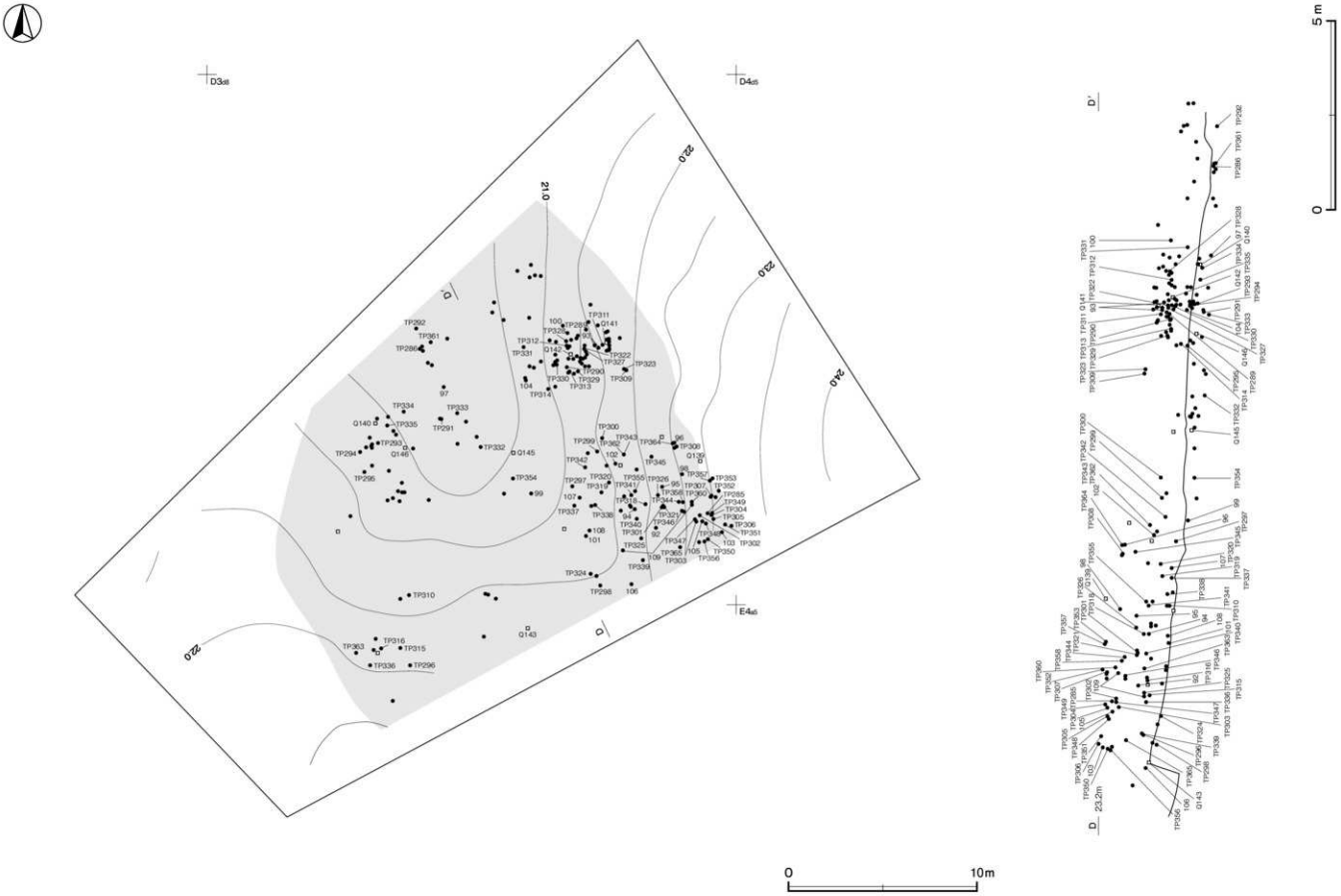
第6図　第８号遺物包含層実測図



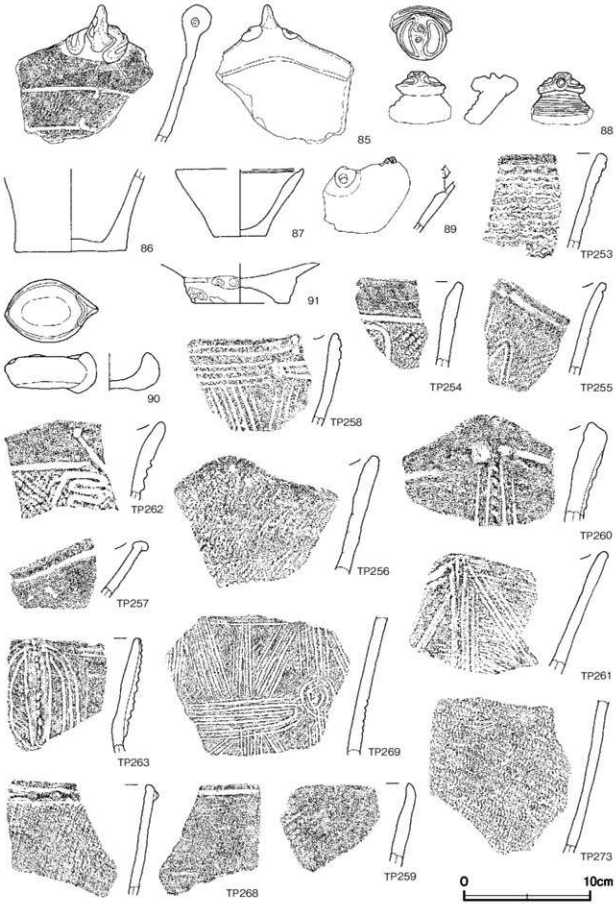
第7図　第8号遺物包含層土層断面図



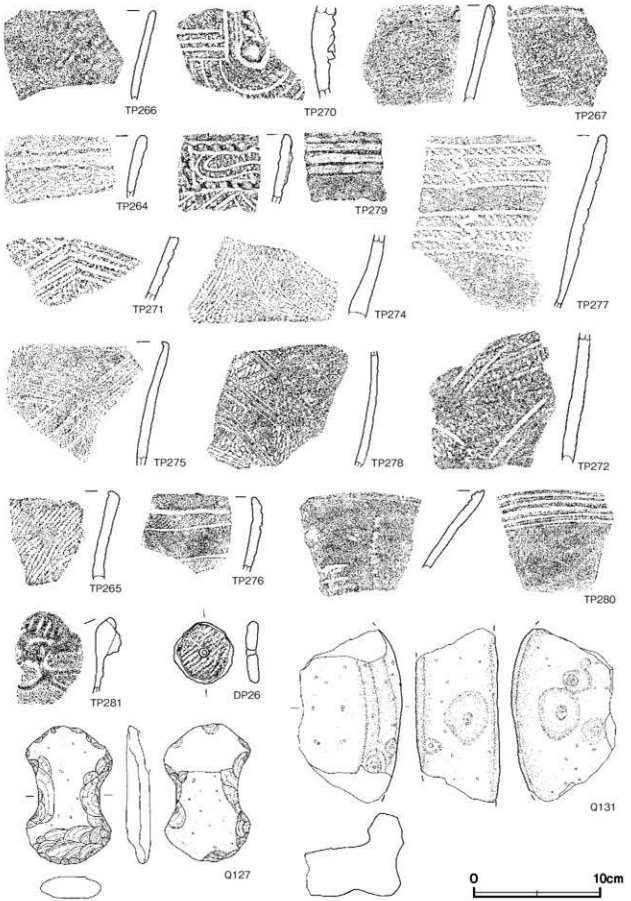
第8図　第8号遺物包含層A層遺物出土状況図



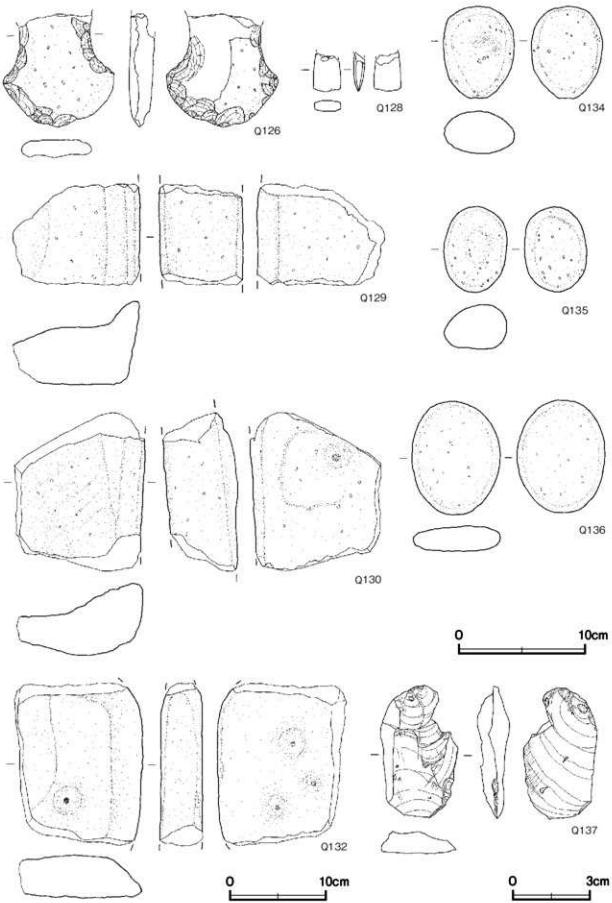
第9図　第８号遺物包含層Ｂ層遺物出土状況図



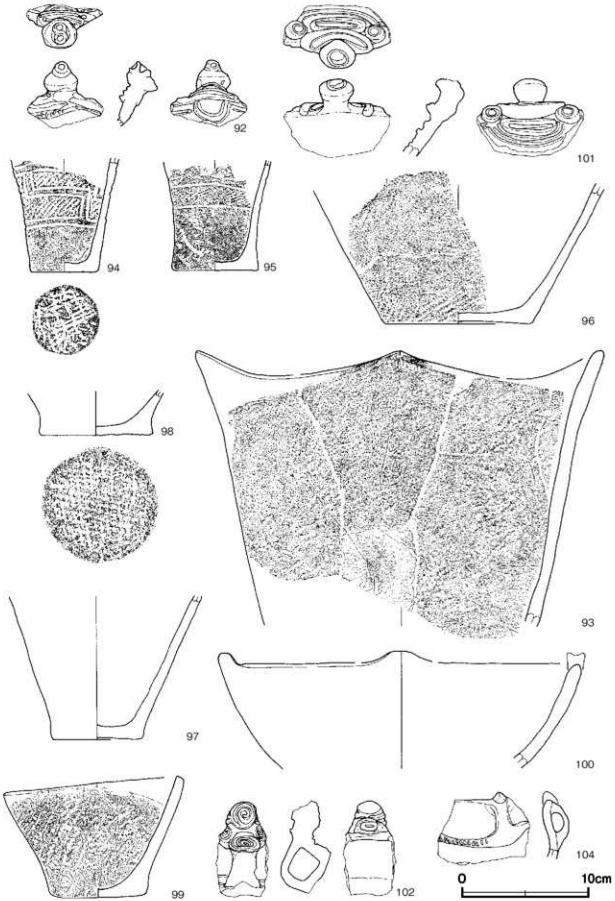
第10図　第8号遺物包含層A層出土遺物実測図（1）



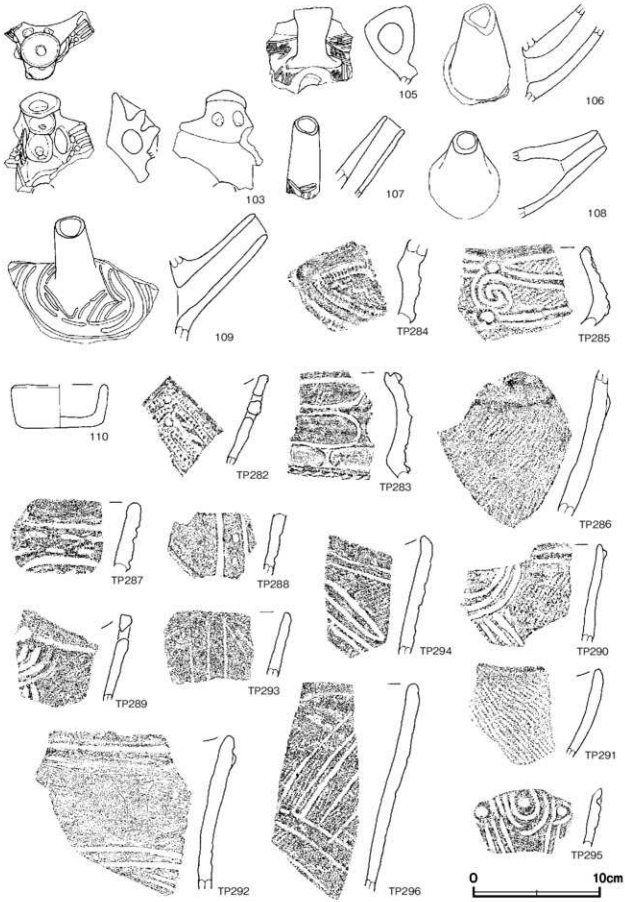
第11図　第8号遺物包含層A層出土遺物実測図（2）



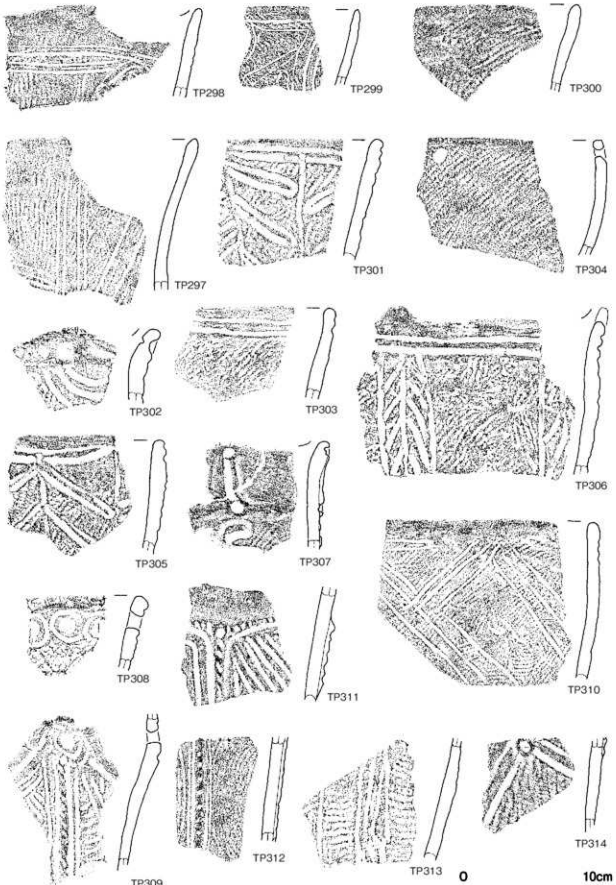
第12図　第8号遺物包含層A層出土遺物実測図（3）



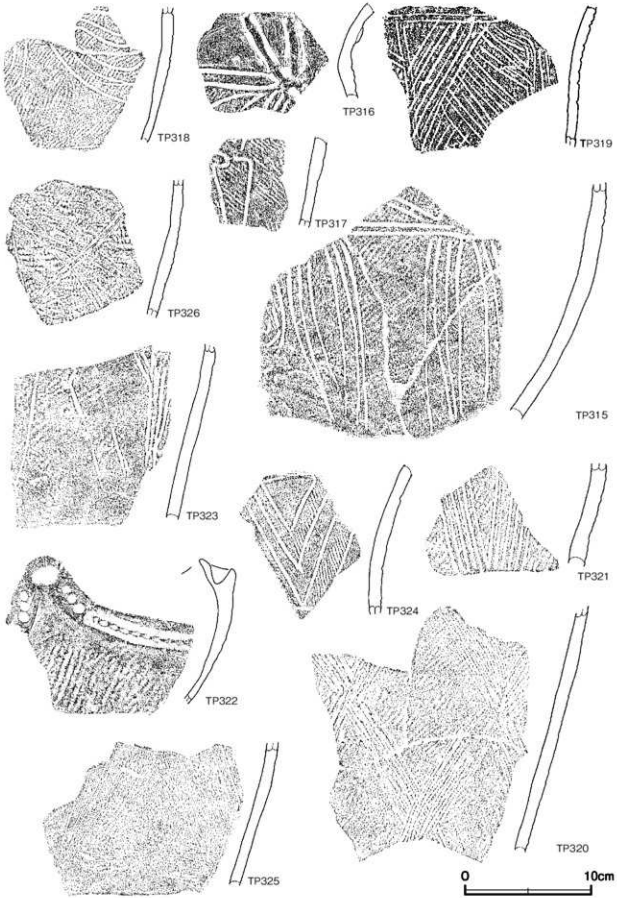
第13図　第８号遺物包含層Ｂ層出土遺物実測図（１）



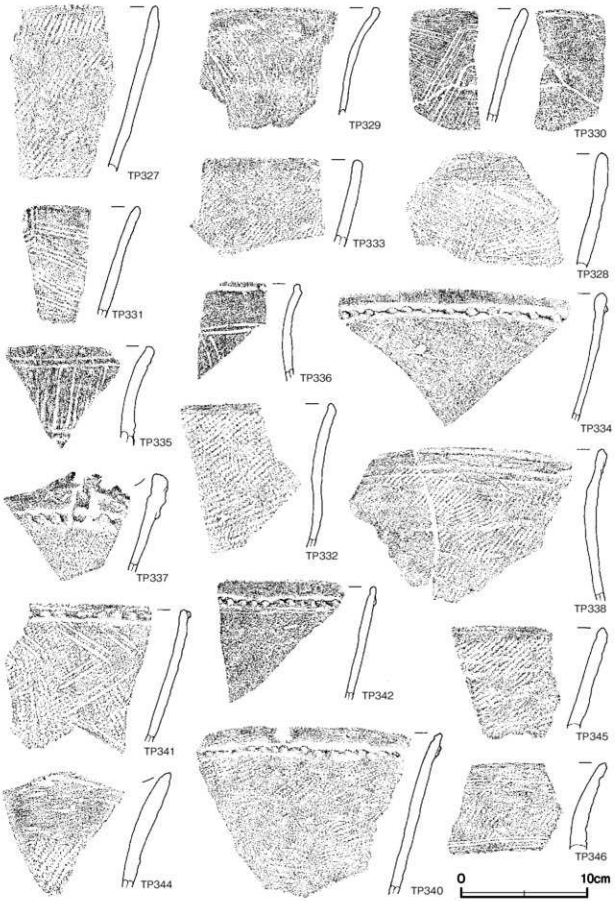
第14図　第８号遺物包含層Ｂ層出土遺物実測図（２）



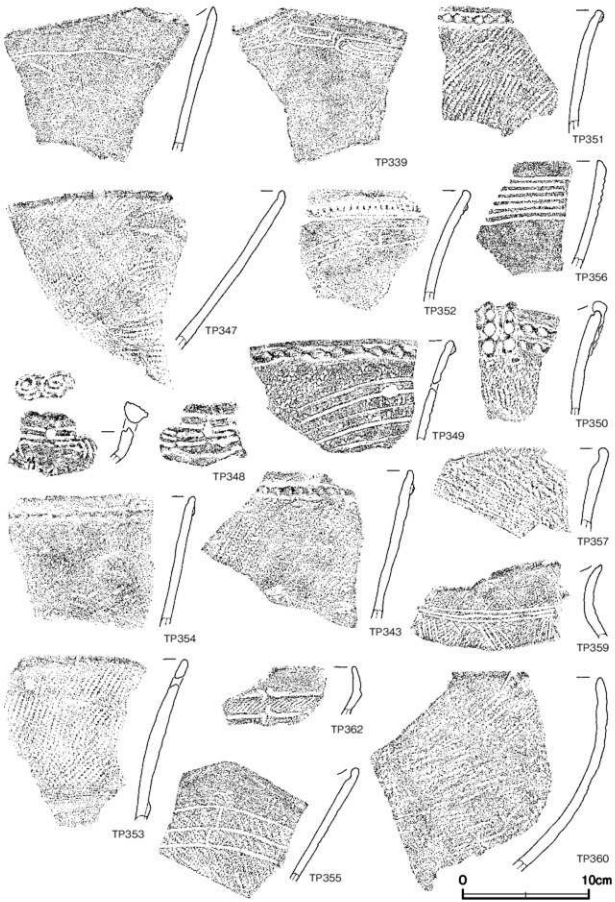
第15図　第8号遺物包含層B層出土遺物実測図（3）



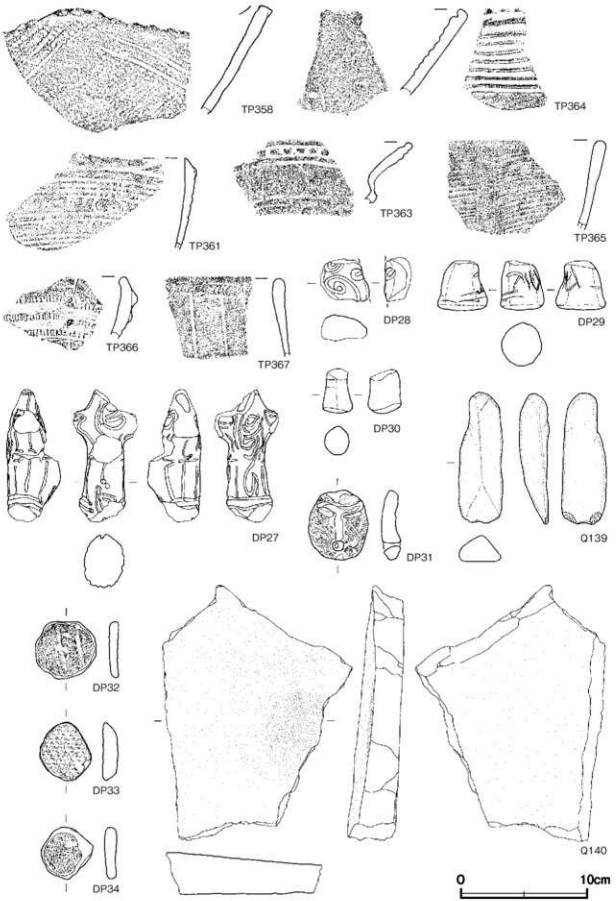
第16図　第8号遺物包含層B層出土遺物実測図（4）



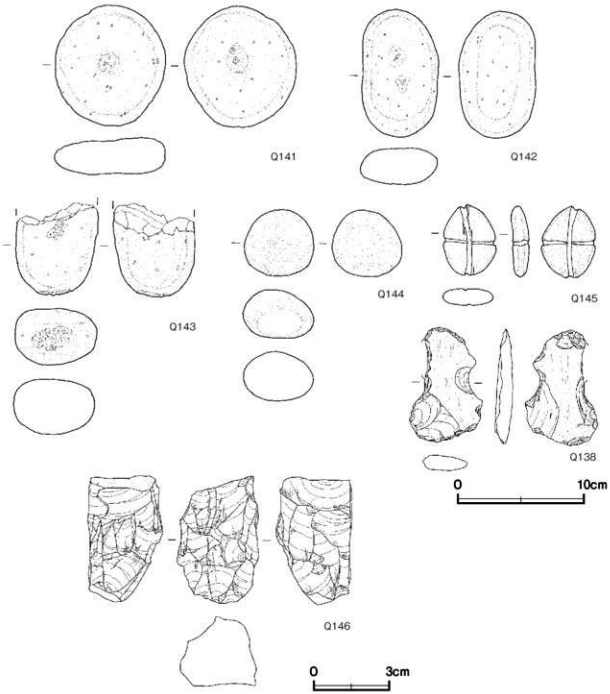
第17図　第8号遺物包含層B層出土遺物実測図（5）



第18図　第8号遺物包含層B層出土遺物実測図（6）



第19図　第８号遺物包含層Ｂ層出土遺物実測図（７）



第20図　第8号遺物包含層B層出土遺物実測図（8）

第８号遺物包含層Ａ層出土遺物観察表（第 10 ～ 12 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
85	縄文土器	深鉢	－	(10.8)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	波頂部把手貼付　沈線を背にした隆帯で加飾　端部鋸状の沈線区画文内　ＬＲの単節縄文	Ａ層東斜面	5％
86	縄文土器	深鉢	－	(6.5)	8.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部下端無文　ナデ	Ａ層東斜面	5％
87	縄文土器	鉢	[10.0]	5.3	4.2	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部内面浅い沈線　胴部無文	Ａ層東斜面	40％　PL 4
88	縄文土器	浅鉢	－	(4.1)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	沈線が沿う隆帯で加飾した突起　口縁部内面横位の沈線文	Ａ層	5％
89	縄文土器	注口土器	－	(6.0)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	頸部キザミを有する隆帯文　胴部無文	Ａ層東斜面	10％
90	縄文土器	ミニチュア土器	7.3	3.2	5.9	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	一端に把手状の粘土貼付　無文	Ａ層東斜面	100％ PL 4
91	縄文土器	台付土器	－	(3.1)	7.6	長石・石英	にぶい黄橙	普通	台部沈線により文様描出	Ａ層中央	60％

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP253	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部隆帯　半截竹管による横位のコンパス文	Ａ層東斜面	PL 4
TP254	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	沈線区画内ＬＲの単節縄文	Ａ層	
TP255	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	波頂部円形刺突文　口唇部沈線文　半截竹管による沈線文　ＬＲの単節縄文	Ａ層東斜面	
TP256	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ＬＲの単節縄文	Ａ層東斜面	PL 5
TP257	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部隆帯　無文	Ａ層東斜面	
TP258	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	波頂部円形刺突文　半截竹管による沈線文	Ａ層東斜面	PL 4
TP259	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	器面磨滅　縄文	Ａ層東斜面	
TP260	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	波頂部下円形刺突文　キザミを有する隆帯垂下　隆帯に平行沈線が沿う	Ａ層中央	PL 5
TP261	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	半截竹管による平行沈線文　ＲＬの単節縄文	Ａ層西斜面	PL 5
TP262	縄文土器	深鉢	長石・石英・黒色粒子	にぶい橙	普通	蕨手状の沈線文　ＬＲの単節縄文	Ａ層中央	PL 4
TP263	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	刺突された隆帯垂下　半截竹管による沈線文　ＬＲの単節縄文	Ａ層東斜面	
TP264	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部２条の微隆帯　斜行条縄文　ＲＬの単節縄文	Ａ層東斜面	
TP265	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部内面沈線　ＬＲの単節縄文	Ａ層東斜面	
TP266	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ＬＲの単節縄文	Ａ層東斜面	
TP267	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部押圧された結縄文　口唇部内面沈線　器面磨滅	Ａ層東斜面	
TP268	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部押圧された結縄文　口唇部内面沈線　ＬＲの単節縄文	Ａ層中央	PL 4
TP269	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	半截竹管による沈線文　ＬＲの単節縄文	Ａ層東斜面	PL 5
TP270	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	キザミを有する隆帯文　平行沈線文　ＲＬの単節縄文	Ａ層中央	
TP271	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	半截竹管による沈線文　器面磨滅　縄文	Ａ層東斜面	
TP272	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	斜行する平行沈線文　ＬＲの単節縄文	Ａ層中央	
TP273	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	ＲＬの単節縄文	Ａ層東斜面	
TP274	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	半截竹管による沈線文　ＬＲの単節縄文	Ａ層東斜面	
TP275	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	Ｘ字状の沈線文	Ａ層東斜面	PL 5
TP276	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	横位の沈線区画文内　ＬＲの単節縄文	Ａ層東斜面	PL 4
TP277	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	横位の沈線区画文内　ＲＬの単節縄文　区画文内区切り文	Ａ層東斜面	PL 5
TP278	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明褐	普通	斜行条縄文　ＬＲの単節縄文	Ａ層西斜面	
TP279	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁沈線押圧された結縄文　平行沈線間にキザミ目の地文口縁部内面沈線	Ａ層	PL 4
TP280	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内面沈線　外面丁寧なナデ	Ａ層東斜面	PL 4
TP281	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	キザミを有する瘤貼付　楕円形区画　口唇部肥厚	Ａ層	PL 4

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特徴	出土位置	備考
DP26	有孔円盤	4.8	4.8	1.1	22.5	にぶい褐　長石・石英・赤色粒子	周縁打ち欠き後、粗い研磨調整　中央部１方向からの穿孔　ＬＲの単節縄文	腐土中	PL 7

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q126	打製石斧	(8.9)	(8.8)	(2.1)	(148.9)	安山岩	分銅形　刃部の一部欠損　扁平な礫を素材とし、両面調整	Ａ層東斜面	PL 8
Q127	打製石斧	10.8	6.9	1.9	(175.1)	安山岩	分銅形　扁平な礫を素材とし、両面調整	Ａ層東斜面	PL 8
Q128	磨製石斧	(3.0)	2.2	0.9	(8.8)	蛇紋岩	定角式　刃部弧状　小形	Ａ層	PL 8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q129	石皿	(7.9)	(10.1)	(6.6)	(455.0)	安山岩	端部を突発状に加工　磨面は皿状に凹む	A層西斜面	PL. 7
Q130	石皿	(12.5)	(10.4)	(5.9)	(670.0)	安山岩	磨面は皿状に凹む　裏面に断面V字状の孔1か所	A層東斜面	PL. 7
Q131	石皿	(13.6)	(8.2)	(6.5)	(585.0)	安山岩	端部を突発状に加工　磨面は平坦　側縁及び裏面に孔7か所	A層東斜面	PL. 7
Q132	石皿	(17.0)	(13.7)	(4.5)	[1840.0]	雲母片岩	断面が台形状になるよう側縁を加工　磨面は皿状に凹む 裏裏面に孔4か所	A層東斜面	
Q134	磨石	7.2	5.6	3.4	180.1	安山岩	全面研磨　一面に擦痕	A層	PL. 7
Q135	磨石	6.7	5.0	3.5	157.3	安山岩	全面研磨　一側縁の研磨顕著	A層	PL. 7
Q136	磨石	8.9	7.0	2.0	160.7	安山岩	全面研磨	A層	PL. 7
Q137	剥片	5.2	3.1	1.3	14.5	黒曜石	縦長剥片　一側縁に二次加工を有する	A層東斜面	PL. 8

第８号遺物包含層Ｂ層出土遺物観察表（第 13 ～ 20 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
92	縄文土器	深鉢	－	(5.2)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	波頂部突起貼付　口縁部内面刺突を起点にした平行沈線で加飾	Ｂ層東斜面	5％
93	縄文土器	深鉢	[32.0]	(21.6)	－	長石・石英	橙	普通	ＬＲの単節縄文	Ｂ層東斜面	20%
94	縄文土器	深鉢	－	(8.9)	5.3	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	平行沈線による横位区画内クランク文・ＬＲの単節縄文　底部網代痕	Ｂ層東斜面	50%　PL. 4
95	縄文土器	深鉢	－	(8.7)	6.6	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	沈線による横位区画内、ＬＲの単節縄文	Ｂ層東斜面	50%　PL. 4
96	縄文土器	深鉢	－	(11.1)	11.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	ＬＲの単節縄文	Ｂ層東斜面	10%
97	縄文土器	深鉢	－	(11.2)	6.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ＬＲの単節縄文	Ｂ層中央	10%
98	縄文土器	深鉢	－	(3.5)	9.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	側部下端丁寧な横ナデ　底部網代痕	Ｂ層東斜面	5％
99	縄文土器	鉢	13.2	9.5	7.6	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	ＲＬの単節縄文	Ｂ層東斜面	100%　PL. 4
100	縄文土器	鉢	[28.8]	(9.1)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	無文	Ｂ層東斜面	10%
101	縄文土器	浅鉢	－	(3.9)	－	長石・石英	橙	普通	把手部沈線文　口縁部内面に一対の円形貼付文	Ｂ層東斜面	5％
102	縄文土器	壺	－	(7.5)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	突起部沈線による渦巻文で加飾	Ｂ層東斜面	5％
103	縄文土器	壺	－	(7.8)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	突起部円形貼付文で加飾	Ｂ層東斜面	5％
104	縄文土器	壺	－	(5.7)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	きざみを有する隆帯　把手貼付	Ｂ層東斜面	10%
105	縄文土器	注口土器	－	(6.8)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	沈線区画内にＲＬの単節縄文	Ｂ層東斜面	10%
106	縄文土器	注口土器	－	(7.7)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	注口部ミガキ	Ｂ層東斜面	5％
107	縄文土器	注口土器	－	(6.4)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	注口部付根に沈線文	Ｂ層東斜面	5％
108	縄文土器	注口土器	－	(6.8)	－	長石・石英	橙	普通	注口部ミガキ	Ｂ層東斜面	5％
109	縄文土器	注口土器	－	(9.9)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	注口部ミガキ　胴部沈線文	Ｂ層東斜面	10%　PL. 4
110	縄文土器	手捏土器	[7.2]	3.4	[6.7]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	無文　ナデ	Ｂ層	40%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP282	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	波頂部下2孔　半截竹管による2列の結節沈線文	Ｂ層	PL. 5
TP283	縄文土器	壺形土器	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	1列の結節沈線文が沿う隆帯による楕円形区画	Ｂ層	PL. 5
TP284	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	結節沈線が沿う隆帯区画内、波状沈線文	Ｂ層	PL. 5
TP285	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	隆帯区画内沈線による渦巻文　ＬＲの単節縄文	Ｂ層東斜面	PL. 5
TP286	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	微隆帯区画下位にＬＲの単節縄文	Ｂ層中央	
TP287	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	沈線区画内に2列の列点文	Ｂ層	PL. 5
TP288	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	沈線区画内に1列の列点文	Ｂ層	PL. 5
TP289	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	波頂部1孔　沈線文　ＲＬの単節縄文	Ｂ層東斜面	
TP290	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	口縁部帯区画　平行沈線文　ＬＲの単節縄文	Ｂ層東斜面	
TP291	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ＲＬの単節縄文	Ｂ層中央	
TP292	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部沈線文　頸部平行沈線文	Ｂ層中央	PL. 6
TP293	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	平行沈線文	Ｂ層西斜面	
TP294	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	平行沈線文　ＲＬの単節縄文	Ｂ層西斜面	
TP295	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	刺突文　沈線文	Ｂ層西斜面	PL. 5
TP296	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	平行沈線文　ＲＬの単節縄文	Ｂ層西斜面	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP297	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	半截竹管による沈線文　Lの無節縄文	B層東斜面	
TP298	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	平行沈線文　RLの単節縄文	B層東斜面	
TP299	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	平行沈線文　LRの単節縄文	B層東斜面	PL 5
TP300	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	器面磨滅　縄文	B層東斜面	
TP301	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	普通	平行沈線文　LRの単節縄文	B層東斜面	PL 5
TP302	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	波頂部円形刺突文　平行沈線文　LRの単節縄文	B層東斜面	
TP303	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	横位の平行沈線文　LRの単節縄文	B層東斜面	
TP304	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部穿孔　LRの単節縄文	B層東斜面	PL 5
TP305	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	沈線文　LRの単節縄文	B層東斜面	PL 5
TP306	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部横位の平行沈線文　縦位の沈線文間，連続した斜行沈線文　多条縄文	B層東斜面	PL 6
TP307	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口縁部無文帯を沈線を有する隆帯で加飾　胴部沈線文　RLの単節縄文	B層東斜面	
TP308	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部穿孔，孔に沈線が沿う　RLの単節縄文	B層東斜面	
TP309	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	波頂部1孔，キザミを有する懸垂隆帯文に沈線が沿う　LRの単節縄文	B層東斜面	
TP310	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	斜行する平行沈線文　RLの単節縄文	B層西斜面	PL 6
TP311	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	キザミを有する隆帯文に沈線が沿う　斜行沈線文	B層東斜面	
TP312	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	キザミを有する懸垂隆帯文に沈線が沿う　器面磨滅縄文	B層東斜面	
TP313	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	平行沈線による懸垂文　RLの単節縄文	B層東斜面	
TP314	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	円形貼付文　平行沈線文　LRの単節縄文	B層東斜面	
TP315	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	平行沈線文　LRの単節縄文	B層西斜面	
TP316	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	隆帯文　沈線文　LRの単節縄文	B層西斜面	
TP317	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	沈線による刺先状文　LRの単節縄文	B層	
TP318	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐	普通	平行沈線文　LRの単節縄文	B層東斜面	
TP319	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	沈線文　器面磨滅　縄文	B層東斜面	PL 6
TP320	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	条線による斜行文・横走文	B層東斜面	PL 6
TP321	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	平行沈線による斜行文　LRの単節縄文	B層東斜面	
TP322	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部沈線文・円形刺突文　RLの単節縄文	B層東斜面	PL 6
TP323	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	縦位の沈線文　LRの単節縄文	B層東斜面	
TP324	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	沈線による三角形文間，LRの単節縄文	B層東斜面	
TP325	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	条線による斜行文　RLの単節縄文	B層東斜面	
TP326	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	平行沈線による斜行文　ナデ　LRの単節縄文	B層東斜面	PL 5
TP327	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	LRの単節縄文	B層東斜面	
TP328	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	半截竹管による沈線文	B層東斜面	PL 5
TP329	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	沈線による斜行文　器面磨滅	B層東斜面	
TP330	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・針状鉱物	褐	普通	条線による斜行文	B層東斜面	PL 5
TP331	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	条線による斜行文	B層東斜面	
TP332	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	LRの単節縄文	B層中央	
TP333	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	LRの単節縄文	B層中央	
TP334	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部押圧された結縄文　RLの単節縄文	B層中央	
TP335	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	半截竹管による横位区画内，縦位の沈線文	B層西斜面	
TP336	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明褐	普通	口唇部刺突文・沈線文　口縁部横位の沈線区画文・斜行沈線文	B層西斜面	
TP337	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部押圧された結縄文　LRの単節縄文	B層東斜面	PL 6
TP338	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部隆帯文　LRの単節縄文	B層東斜面	
TP339	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部内面沈線区画内，LRの単節縄文　外面沈線間LRの単節縄文	B層東斜面	PL 6
TP340	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部押圧された結縄文　LRの単節縄文	B層東斜面	PL 6
TP341	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部押圧された結縄文　斜行沈線文　RLの単節縄文	B層東斜面	PL 6
TP342	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部押圧された結縄文　口唇部内面沈線	B層東斜面	
TP343	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部押圧された結縄文　LRの単節縄文	B層東斜面	PL 6

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP344	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部無文　LRの単節縄文	B層東斜面	
TP345	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	Lの無節縄文	B層東斜面	
TP346	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	平行沈線による横位の区画文 口唇部刻突 LRの単節縄文	B層東斜面	
TP347	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部内面沈線　LRの単節縄文	B層東斜面	
TP348	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	波頂部沈線による渦巻文　口縁部内外面平行沈線文	B層東斜面	
TP349	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部押圧された縁線文　穿孔　平行沈線文　LRの単節縄文	B層東斜面	PL. 6
TP350	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部押圧された縁線文　RLの単節縄文	B層東斜面	
TP351	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	口縁部押圧された縁線文 口唇部内面沈線 LRの単節縄文	B層東斜面	
TP352	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部キザミを有する縁線文 平行沈線間 LRの単節縄文	B層東斜面	
TP353	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部補修孔　横位の条線文・隆帯文　LRの単節縄文	B層東斜面	PL. 6
TP354	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口縁部押圧された縁線文 口唇部内面沈線 LRの単節縄文	B層東斜面	
TP355	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	横位の沈線区画内に区切り文　RLの単節縄文	B層東斜面	PL. 6
TP356	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	平行沈線による横位の区画文	B層東斜面	PL. 5
TP357	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	条線による斜格子文　RLの単節縄文	B層東斜面	PL. 6
TP358	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部押圧された縁線文・沈線文　LRの単節縄文	B層東斜面	PL. 6
TP359	縄文土器	壺	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部無文　頸部横位の平行沈線文　平行沈線による斜格子文	B層	PL. 6
TP360	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	LRの単節縄文	B層東斜面	PL. 6
TP361	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	横位の沈線区画内に区切り文　LRの単節縄文	B層中央	PL. 6
TP362	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	横位の沈線区画施部に区切り文　LRの単節縄文	B層東斜面	PL. 5
TP363	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口唇部内面沈線　沈線文	B層西斜面	PL. 5
TP364	縄文土器	浅鉢	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	口唇部キザミ・刺突文　口縁部内面平行沈線文	B層東斜面	
TP365	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部肥厚　条線による弧状文	B層東斜面	
TP366	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部沈線が沿う刻縄文　貼瘤	B層	PL. 5
TP367	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部肥厚　縦位の沈線文	B層	PL. 5

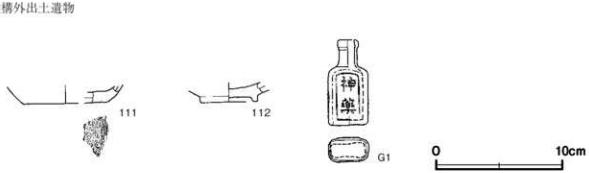
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特徴	出土位置	備考
DP27	土偶	(10.4)	(5.0)	4.2	(135.8)	にぶい橙　長石・石英・赤色粒子	ハート形土偶の胴部　沈線により文様描出	B層	PL. 7
DP28	土偶	(3.5)	(3.8)	(2.2)	(27.8)	橙　長石・石英・赤色粒子	胴部　腹部欠損　沈線による渦巻文	B層	PL. 7
DP29	土偶	(3.9)	(3.5)	(4.0)	(63.0)	にぶい橙　長石・石英・赤色粒子	脚部　沈線文	B層	PL. 7
DP30	土偶	(3.5)	(2.4)	(2.7)	(30.7)	にぶい黄橙　長石・石英・雲母	脚部　沈線文	B層	
DP31	土版	5.5	4.7	1.5	37.0	にぶい黄褐　長石・石英	人面　隆帯の一部剥落　下位に一方向からの穿孔　LRの単節縄文	B層	PL. 7
DP32	土器片円盤	4.5	4.8	0.8	18.8	にぶい黄褐　長石・石英・赤色粒子	周縁打ち欠き調整　表面磨滅	B層	
DP33	土器片円盤	4.6	4.0	1.2	20.7	にぶい褐　長石・石英・赤色粒子	網代痕のある底部片の周縁を研磨調整	B層	PL. 7
DP34	土器片円盤	4.1	4.1	1.0	17.4	橙　長石・石英・赤色粒子	周縁粗い研磨調整　表面磨滅　縄文	B層	PL. 7

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q138	打製石斧	9.1	5.7	1.3	(61.6)	凝灰岩	分銅形　扁平な礫を素材とし両面調整	B層	PL. 8
Q139	磨製石斧	10.2	3.5	2.3	99.0	砂岩	棒状の礫を素材とし、研磨調整後、一側縁を剥離調整し、刃部作出	B層東斜面	PL. 8
Q140	石皿	(20.2)	(15.0)	(4.4)	(1330)	安山岩	一側面が風状にごく浅く凹む	B層西斜面	
Q141	磨石	9.5	8.9	3.0	365.0	安山岩	全面研磨　両面に痕状の凹み	B層東斜面	PL. 7
Q142	磨石	10.0	6.2	2.9	270.0	安山岩	全面研磨　一面に痕状の凹み	B層東斜面	PL. 7
Q143	磨石	(7.4)	6.5	4.4	(260.0)	安山岩	全面研磨　一面に痕状の凹み　一端部に敲打痕	B層西斜面	
Q144	磨石	5.3	5.5	3.9	163.9	砂岩ヵ	全面研磨　一端部に顕著な使用痕	B層	PL. 7
Q145	石錘	5.6	4.2	1.3	41.3	流紋岩	十字状の切り込みを有する有溝石錘	B層東斜面	PL. 8
Q146	石核	5.0	3.2	3.0	63.0	チャート	礫面から上下方向に加撃し連続的な剥片剥離痕を残す	B層西斜面	PL. 8

2　その他の遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物のうち，縄文時代以外の特徴的な遺物について，実測図と観察表を掲載する。

遺構外出土遺物



第21図　遺構外出土遺物実測図

遺構外遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
111	土師質土器	小皿	—	(1.4)	[6.8]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	表土	5%
112	陶器	碗	—	(1.5)	4.6	鉄釉・貫入釉	灰オリーブ 褐灰赤褐	良好	外面鉄釉　内面貫入釉　削り出し高台	表土	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	色調	特徴	出土位置	備考
G 1	ガラス製品	小瓶	1.6	6.7	2.8	濃青	首部まで合わせ目　胴部盛り上げ部に「神藥」　ガラス内に気泡	表土	100%　PL 8

第4節　ま　と　め

今回の調査で，当遺跡は，遺物包含層を形成しながら舌状台地上に営まれた，縄文時代後期前葉を主体とする集落跡であることを確認することができた。3次にわたる調査により，当集落全体の7割近い面積を調査したことになり，本県域では調査例の少ない縄文時代後期前葉の集落構造を検討するための良好な資料となった。ここでは，平成8・9年度に実施した第1・2次調査の成果をふまえ，縄文時代後期の集落景観を概観するとともに，第12号住居跡で確認した「倒置深鉢」について若干の考察を加え，まとめとしたい。

1　縄文時代後期の集落について

当遺跡で確認された縄文時代の竪穴住居跡は，第1・2次調査と合わせて11軒である。時期別の内訳は，後期前葉が10軒（堀之内1式期9軒，堀之内2式期1軒），晩期前葉が1軒（安行3b式期）であり，後期前葉堀之内1式期が集落の盛期である。該期の住居跡は，遺物包含層が形成されている斜面に面する台地際に2軒ほどの小グループを構成し，3～4ブロックで環状の集落を形成している。その他の集落を構成する要素は，土坑115基，地点貝塚4か所，焼土遺構6基，遺物包含層5か所であり，その性格が明らかになっているものは少ないものの，概ね縄文時代後期の所産と判断されている[1]。土坑については，住居跡と同様の場所に分布しているものが多く，他に中央部に散在しているものもある。本県域で縄文時代後期前葉に一つの盛期をみる集落には，龍ヶ崎市廻り地A遺跡[2]や五霞町石畑遺跡[3]，古河市釈迦才仏遺跡[4]などがあり，当遺跡と同様の集落配置が見られる。これらの遺跡で見られる集落配置は，本県域ひいては東関東地域に通有の傾向であ

る。環状集落の中央部に位置する土坑が散在する場所については，関東地方の類例から墓域の可能性があるが，人骨などが出土していないため推測の域を出ない。一方，関東地方の後・晩期の拠点的な集落には，中央に窪地を有し，その周囲に住居などが配されている「中央窪地形環状集落」が多いことも指摘されている。江原美奈子氏は，境町本田遺跡の分析から，同遺跡や古河市釈迦才仏遺跡が「中央窪地形環状集落」と同様の在り方を示していると指摘している[5]。当遺跡では中央部の窪地は確認できなかったが，谷を挟んだ西対岸に位置する後期後葉から晩期前葉の斜面貝塚及び斜面包含層を伴う上境旭台貝塚と併せて再検討する必要があろう。

第22図　中根中谷津遺跡遺構分布図

上境旭台貝塚との関連性・連続性については，谷津を挟んで対峙するという地理的条件，当遺跡の北部台地際に上境旭台貝塚集落と同時期の安行3b式期の住居跡が1軒あること[6]などから十分に想定できる。しかし，当遺跡で確認した環状集落の終焉が後期前葉（堀之内2式期）であり，上境旭台貝塚で確認された集落の出現期は後期後葉であって，時間的空白がある。一方で，両遺跡からその遺構の空白期にあたる後期中葉の土器片が一定量出土しており，調査区域外に集落が展開していた可能性も考えられる。今後の課題である。

2　第8号遺物包含層について

関東地方の縄文時代後期集落では，当遺跡のように遺物が多量に出土する遺物包含層が特徴的に見られるようになるが，その成因や性格については議論途上の段階である。その仮説のひとつに施設の構築・廃棄の連続によるといった人為的な行為に成因を求めるものがある。当遺跡に後続する上境旭台貝塚では，斜面部に厚い遺物包含層が確認されており，その堆積層の様相と斜面貝層との比較から「斜面包含層（捨場遺構）」との性格付けがなされている[7]。これは，鈴木正博氏が説く「斜面投棄作法」との関連のなかで論じられているものである[8]。

今回調査した第8号遺物包含層は，遺物の出土量において他の4か所の遺物包含層を大きく凌駕している。特にB層については，堀之内1式期の土器片が6割を超え，比較的大形の破片が多かったことやローム土を一定量含んだ褐色土が堆積していることなどから，集落からの廃棄行為を成因のひとつに想定した。これは前述した上境旭台貝塚で行われた「斜面投棄作法」に基づく「斜面包含層」形成の考え方を援用したものである。当遺跡と上境旭台貝塚の連続性が確認できていない段階で結論付けることは早計であるものの，窪地となって

いる斜面に生活上の廃棄物を捨てるという行為や意思が後期前葉にも働いていたことは，近年の調査例からも十分に想定できる。そのうえで台地の地形を俯瞰すると，当遺物包含層は入り江状の亜支谷の谷津頭にあたり，集落の周縁部に位置していることから，「斜面包含層（捨場遺構）」が形成されうる場所と想定できる。これらの状況を勘案すると，当遺物包含層は，自然営力による台地からの土砂の流入と後期前葉における集落の造営に関連した土地利用や生活上の廃棄物などの投棄による埋没の両要因が相俟って，縄文時代後期前葉から後葉にかけて断続的に埋まっていったものと判断できる。

3　第12号住居跡の「倒置深鉢」について

第12号住居跡の北西壁際に位置するピット上層から，伏せられた状態で出土している深鉢を「倒置深鉢」の範疇に入るものととらえた。「倒置深鉢」は，埋甕の研究の中から提起されたもので，文字通り深鉢を倒置状態に設置したものを総称した概念である[9]。これには，①住居の出入口部に相当する位置に逆位に埋設されたもの，②出入口埋甕とは異なる位置に倒置状態で埋設されたもの，③住居外に倒置状態で埋設されたものなどのバリエーションがあるが，埋設状態をとらず床面上から検出されるものも少なくない。また，胴部下半を欠いている例が多く，「甕被葬」を中心とした埋葬との関連でとらえられている。かかる属性を有する「倒置深鉢」は，関東・中部地方を中心とする地域に分布の主体があり，時期は中期後葉期に集中する傾向も指摘されている[10]。本跡例は，時期はやや下るものの，これらと同様の属性を有し，「倒置深鉢」の一例であると判断した。しかし，深鉢を設置した目的については，人骨等が確認されておらず，理化学的な分析も経ていないため埋葬に関わるものかどうかは判然としない。出入口に伴うと判断されるピットから出土している状況から推して，住居廃絶に伴う何らかの儀礼的な行為の所産と解釈しておきたい。このことは，本住居跡が「捨場遺構」の一面を有する第８号遺物包含層内に構築されていること，廃絶時に埋め戻されていることによっても追認できるであろう。類例の増加を待ちたい。

註

1）川村満博「〈仮称〉中根・金田台地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　中谷津遺跡１」『茨城県教育財団文化財調査報告』第139集　1998年９月
2）瓦吹堅・桜井二郎・高村勇「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書７　廻り地Ａ遺跡（上）」『茨城県教育財団文化財調査報告書』XV　1982年３月
3）a 瓦吹堅「石畑遺跡　Ⅰ地区発掘調査報告」猿島郡五霞町教育委員会　1977年３月
b 成島一也「石畑遺跡　12県単道改第12-03-261-0-052号埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財団文化財調査報告」第192集　2002年３月
4）川津法伸「主要地方道つくば古河線緊急地方道路事業地内埋蔵文化財調査報告書　大橋Ｂ遺跡・釈迦才仏遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第131集　1998年３月
5）江原美奈子・大関武「本田遺跡　一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第313集　2009年３月
6）　上境塩台貝塚の住居跡は縄文時代後期末から晩期に入ると斜面部や低地部に占地を移していくという，関東地方通有の傾向がみられる。当遺跡で確認できた安行３ｂ式期の住居跡は，この動静より上境塩台貝塚集落に内包されるものとも解釈できる。上境塩台貝塚の集落分析を通して，より明確にできると考える。
7）江原美奈子「上境塩台貝塚２　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XV」『茨城県教育財団文化財調査報告』第364集　2012年３月
8）鈴木正博「馬場小室山遺跡における「環状土塚」の構成と形成プロセス―「環状土塚」の「外部構造」と「５号土塚」の内部構造，そして「斜面掘削」の意義―」『築良岐考古』第27号　築良岐考古同人会　2005年５月
同氏は，本論文で，斜面部に形成される遺物包含層について，「貝塚の「斜面投棄作法」でも遺物が大量に出土するが，この「斜面投棄作法」が内陸部でも実施されると「斜面包含層（捨場遺構）」と呼ばれるのである。」と述べている。
9）山本暉久「倒置深鉢」『総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会　2008年６月
10）註９）に同じ

参考文献

・瓦吹堅「茨城県における縄文時代集落の諸様相」『第１回研究集会基礎資料集　列島における縄文時代の諸様相』縄文時代文化研究会　2001年12月

写　真　図　版

調査区全景（北西上空から）

第12号住居跡
遺物出土状況

第12号住居跡
深鉢出土状況

第12号住居跡
完掘状況

第８号遺物包含層
A層遺物出土状況

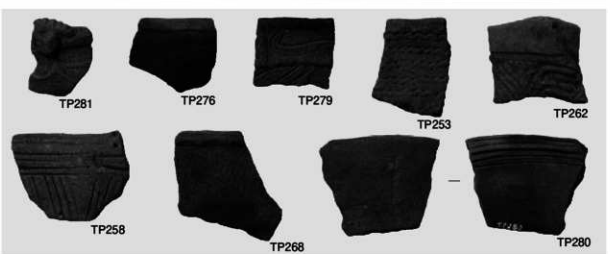
第８号遺物包含層
A層遺物出土状況

第８号遺物包含層
A層遺物出土状況

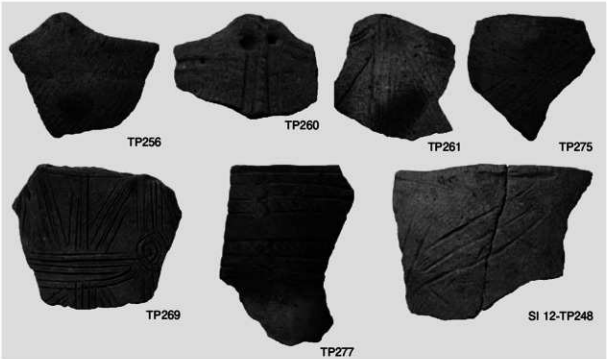
第８号遺物包含層
B層遺物出土状況

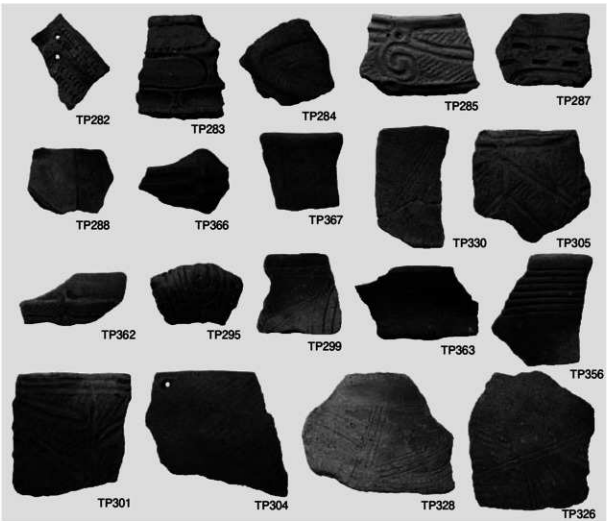
第８号遺物包含層
B層遺物出土状況

第８号遺物包含層
B層遺物出土状況

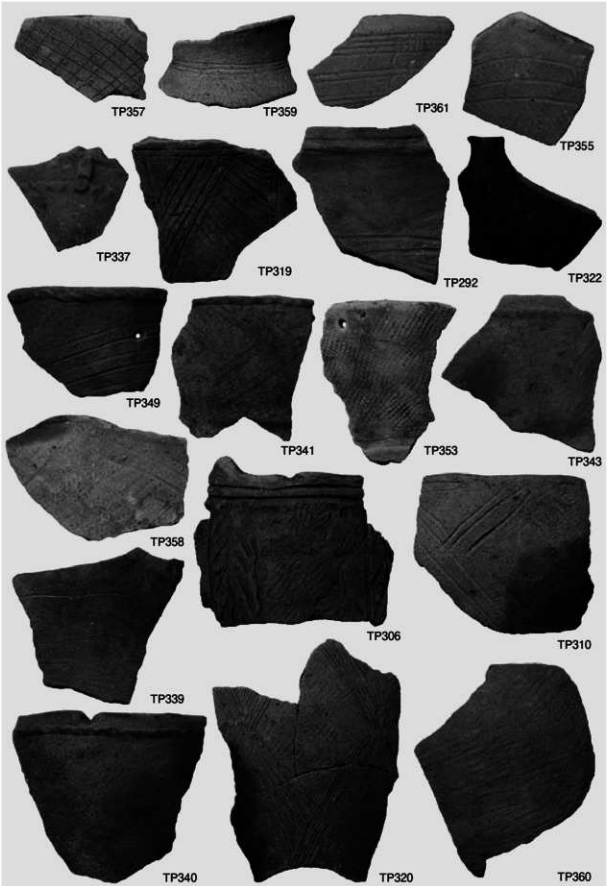


第12号住居跡・第８号遺物包含層出土土器

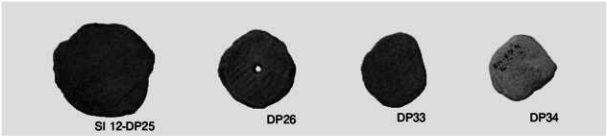


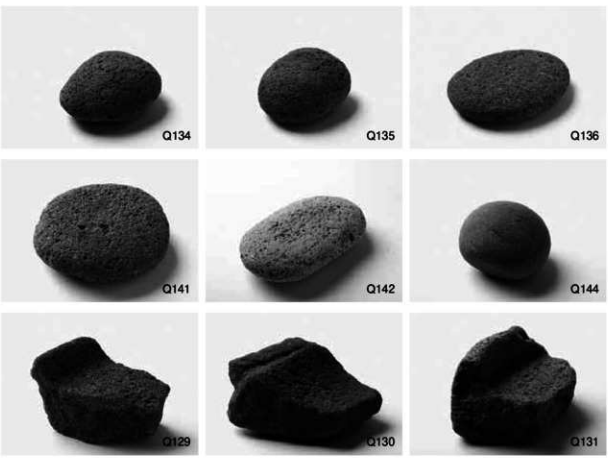


第12号住居跡・第８号遺物包含層出土土器

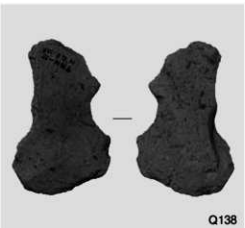


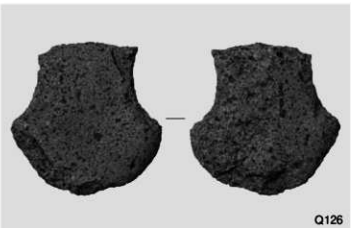
第8号遺物包含層出土土器





第12号住居跡・第８号遺物包含層出土土製品，石器





第８号遺物包含層出土石器，遺構外出土ガラス製品

抄　　録

ふりがな	なかねなかやついせき２
書　　名	中根中谷津遺跡２
副　書　名	中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第 367 集
著　者　名	荒蒔克一郎
編 集 機 関	公益財団法人茨城県教育財団
所　在　地	〒310－0911　茨城県水戸市見和１丁目 356 番地の２　　ＴＥＬ 029－225－6587
発　行　日	2013（平成 25）年３月 15 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
中根中谷津遺跡	茨城県つくば市字中谷津 815 番地ほか	08220－120	36 度 06 分 11 秒	140 度 07 分 52 秒	22～25 m	20101101～20101231	831 ㎡	中根・金田台特定土地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中根中谷津遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡　1 軒	縄文土器（深鉢・鉢・浅鉢・壺・注口土器・ミニチュア土器・手捏土器），土製品（土偶・土版・有孔円盤・土器片円盤），石器（磨製石斧・打製石斧・石皿・磨石・石錘），石核，剥片	
	その他	縄文	遺物包含層　1 か所		

要　　約	今回報告した調査区は，第 139 集で報告した調査区南西側の斜面部である。遺物包含層からは，縄文時代後期前葉から中葉の土器片が多量に出土しており，当包含層は東側の台地上に占地する該期集落からの土器の廃棄行為と流れ込みの二つの要因が相俟って形成されたものと考えられる。また，谷を挟んで西側に位置している上境旭台貝塚に先行する集落であることも明らかになった。

仕　　様

編　集	ＯＳ	Microsoft Windows 7
		Home Premium Service Pack 1
	レイアウト	Adobe InDesign CS5.5
	図版作成	Adobe Illustrator CS4
	写真調整	Adobe Photoshop CS4
	Scanning	6×７film　Nikon SUPER COOLSCAN9000ＥＤ
組　版	OpenType13級リュウミンPro・Ｌ 基本	
	Adobe InDesign CS5.5	
印　刷	オフセット印刷	
写真製版	スクリーン線数　モノクロ175線	

・印刷所へは，Adobe InDesign CS5.5でレイアウトしたものを入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第367集

中根中谷津遺跡２

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅻ

平成25（2013）年　3月12日　印刷
平成25（2013）年　3月15日　発行

発行　公益財団法人茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587
ＨＰ　http：//www.ibaraki-maibun.org

印刷　いばらき印刷株式会社
〒319－1112　那珂郡東海村村松3115－3
TEL　029－282－0370